
魔法世界に降り立った砂の王

無名の新人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法世界に降り立った砂の王

【Nコード】

N2909S

【作者名】

無名の新人

【あらすじ】

世間から嫌われてきた青年が神に力をもらい好き勝手する話です。

注) この小説には外道成分が含まれております

プロローグ（前書き）

初投稿です。

感想等貰えたら嬉しいです。

プロローグ

今俺は白い空間に居る

トラックに轢かれて死んだ俺は気が付いたらこの空間に居た

目の前に居る神と名乗る男によればどうやら転生させてくれるらしい理由を聞くところによると『暇つぶし』だそうだ

そして転生先の世界とそこでの人生についてついて3つまで決めさせてくれるらしいから今は神にその事について考える時間をもらったところだ

「暇つぶしにならんから俺が楽しめる世界で頼むぞ」

てつきり元の世界に転生するものと思っていたからそんなこと言われてもとっさに思いつかないな。

そうだな．．．．．ネギまにするか、俺TUEEEEとかそういう状態になってその後原作キャラでハーレムでも作ろう。

「ネギまの世界でお願いします」

「わかった、それで3つ決まったのか？」

「いえ、まだです」

「さっさと決めるボンクラが」

「．．．わかりました」

こいつもかどいつもこいつも俺を軽んじやがって、生前も散々いじめにあった。

俺がブサイクでヲタクだからって唯それだけの理由で家族までもゴ

ミを見るような眼で俺を見やがった。

「見た目で相手を圧倒できる力が欲しいです」

「つまりお前を見た相手が恐れられる様な見た目にしろと言つことか？」

「いえ、なんというか本能的に恐れられるような雰囲気と言いますかカリスマをお願いします」

「へえ、良いじゃん、お前を見てビビる馬鹿どもの醜態が楽しみだ。で、他は？」

「まだ考え中です」

「だから一度で決めろって何度も同じことを言わせるなよ」

「すいません」

「今ので腹立つてきた、さっさと決めないと別の奴選ぶから」

「わ、わかりました。わかりましたんでもう少しだけ待って下さい」

クソ！さっさと決めねえとヤベエ

やっと俺が望んだ通りのことの出来るのに

こうなったら適当に王の財宝とかにしてさっさと「そんな向こう行っても面白くなさそうな能力選ぶんだったら別の奴選ばうかな」ッ

！！

心を読まれた？なら今までの暴言も全部聞かれ「余計なこと考えてんじゃねえよ、俺はさっさと決めろつたよな？」

「す、すいません」

そうだ、早く決めねえと！

ネギまで尚且つコイツを・・・神様を楽しませられるような内容考えないと

さっきの口振りからしてネギまの奴らをボコった方が楽しませることが出来そうだ

ネギまの奴らがビビるような能力・・・もしくはビビるようなボコり方が出来る能力か

「決めました」

「なんだ？」

「スナスナの実の能力と物事の利益をすぐに判断出来るようにして下さい」

「わかった、なら行って来い」

そう言う俺は転送された。

その時俺が考えていたのは当初考えていたハーレムなどが出来る喜びではなく、生き残るためにこの神様をいかに楽しませるかだった。

ブログ（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。
更新は不定期になりますが頑張って完結させたいと思います。

戦場に降り立った青年（前書き）

楽しんでいただければ幸いです

戦場に降り立った青年

辺りを見渡すと戦場のド真ん中だ

時期がわからないがあいつも原作に関わる時期に送るだろうから多分大戦の最中だろう

「ヒッ！」

「な、なんだこいつはどこから出て来た！」

「ほ、本陣に連絡しろ！」

流石に何も無いところから人が出て来たら警戒されるだろうなそれにしても本陣に連絡とはビビリ過ぎじゃないのか？

つて、あいつに貰った能力の所為か

・・・何か楽しくなってきた

生前、人に対してビビりながら過ごしていた。

それが今はビビられる立場か

「お、おい」

「ああ？」

「ッ！貴、貴様は亜人共の仲間か？」

ドスを効かせた声色を選んだつもりだったが想像していたよりも反応が薄いな

・・・やはり今まで人を脅した事なんて無いから上手く出来ないのだろう

俺としては眼光だけで相手を黙らせたいもんだな
そっいうのはやはり格好が良い

まあ、その内出来るようになれば良いか

「その口振りだと連合の人間か」

「そ、そうだが。お前の所属はどっちださつさと言え！」

こいつ偉そうだな

殺すか

こうして俺は初めての殺人に至った。

- 連合の兵士 side -

この青年が現れた時は驚いた

何もない空間から突然現れたのだから

しかし驚いた理由はそれではない、それだけならただの転移魔法で説明できる。

問題は青年が纏った雰囲気だった

彼を視認した途端足が動かなくなった

しかし見た目が10代中盤の青年だという事が確認できたので所属を聞こうと声を掛けるとかなりドスの効いた声で返された

思わず怯んでしまったが所属を聞くと聞き返された

不審に思いながらも答え、再び所属を聞いた

すると青年の雰囲気明らかに変わった
まさかこいつは亜人の仲間か？
「どうした？何故答えない！？」

目の前のマントをはおった青年に再び所属を聞いた
すると足を何かに掴まれた

見てみると何かが体にすごい速度で纏わりついてきた
「な、何だこれは」

体がどんどん持ち上げられていく
これは・・・砂？

纏わりついているものが砂だと認識するのとはほぼ同時に彼の表情が
見えた

彼は私を見ていた

その表情から読みとれる感情は怒り

ああ、私は彼に殺されるのだと認識すると同時に体に圧力が掛かる
のを感じた

戦場に降り立った青年（後書き）

感想等戴けば嬉しいです。

紅き翼と青年（前書き）

誤字脱字等のご指摘いただければ嬉しいです。

紅き翼と青年

どうせなら派手に殺すか

どうやらここらは砂が多いようだ

「どうした？何故答えない！？」

兵士が何か言っているが俺は気にせずに辺りの砂を奴に絡みつかせる。

俺がやるうとしている技は我愛羅が使用していた砂漠葬送だ
漫画で読んでいたからかイメージしやすい

「な、何だこれは」

今頃自分の状況に気付いた様だがもう遅い

奴の体が地を離れていく

周りの兵士は茫然として何も出来ないでいる

奴の体が砂の圧力で軋んでいく

「見せしめだ。砂漠葬送！！」

手の平を握り潰すと同時に奴だった物が辺りに飛散る

一瞬の空白をおいて

辺りの兵士はやつと状況が理解できたらしい

しかし襲い掛かって来る者はごく少数だ

殆どの者は顔を青ざめて何も出来ないでいる。

中には腰を抜かしている者

あまりの恐怖からなのか無惨に飛び散った同僚の姿を見たからなのか
そのどちらかの所為で限界を超えて嘔吐している者

なる程、惨たらしく殺せば恐怖心を助長させることが出来るのか

目の前に居るのは訓練を受けてこの戦場へやって来た兵士

この中には今まで何度も戦場に出て来たことのあるような歴戦の猛者とかが言われる奴らも居るのだろう

そんな奴らがここまでの恐れ様

こいつらが見てる俺ってどんな感じなのだろう・・・多分俺が見たら気絶しそうだな

襲い掛かって来た兵士の攻撃は俺の体を通り抜け、俺には一切のダメージが無い

「この力だ！！この力で今までの俺を変える！！！！！！」

「効、効かないだ！？何を座り込んでいるんだ！？早く呪文を「しゃらくせえ！！」な、何だ！？」

流砂を発生させて周りの兵士を地中に引きずり込んだ

クロコダイルが使っていた砂漠の向日葵という技だ

「た、助けてくれええ！！」

「ひっぱり上げてくれえ！！」

流砂の周りにいる兵士達が助けようとするが、どんどん広がる流砂に足を取られそいつらまでもが引きずり込まれていく

「ヒヤハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！」

辺りが砂以外無くなった頃

連合の本陣から送られてきた増援が来たようだ

ナギ・スプリングフィールドside

前線で敵を蹴散らしているとアルが声を掛けてきた

「本陣から右翼へ行けという指令が来ました」

「何でだよ？」

「どうやら帝国からの刺客が来たようです」

「わかった、わざわざ俺を遣わすということはよっぽど強いんだろ
うな。ワクワクしてきたぜ！」

「はあ、お前つて奴は」

近くで話を聞いていた詠春が何か言ってるが関係ねえ
俺たちは右翼へ向かった

[illegible]

兵士の悲鳴が辺り一面から聞こえる中で男は嗤っていた。

「な、何だあいつは！」

詠春が驚くのもわかる

この地獄を作り上げ、なおかつ嗤っているとはな
すると流砂が収まったようだ

「よし、攻めるぞお前ら！」

皆に声を掛けて奴に攻めようとする

すると今の俺の声で気が付いたのか奴と目が合った
その瞬間背筋が凍りついたような感覚が走った

紅き翼と青年（後書き）

神様は恐怖カリスマを上げまくったみたいですね

原作キャラとのファーストコンタクト

あれは紅き翼の奴らか

まあ、あの神様は奴等がいる戦場に送ると思って居たがこんなに早く会うつとはな

そして紅き翼とは反対方向では帝国の兵士がこっちに近付いて来ている

さて、どうするか

この場から離脱するのは難しいだろう

それにもし離脱などして原作から逃げようものなら神様に何をされるか解らん

此処で一番得策なのは……………

俺を指差し号令をかけているナギと目が合った

その顔を見て今まで嗤っていた顔が更に歪んでいく

ーナギs i d e ー

俺の背筋が固まった直後、あいつが足下からどんどん消えていった

！？何だあの魔法は！？

いや、それよりもあいつは何処へ行った！？

俺の号令で動き出していたアル達と本陣からの増援で来た兵士達も足を止めた

辺りを見渡しても見当たらない

「バラけて居てはいけません！」

アルが俺達を含め、兵士達に大声で呼びかける

兵士達は突然大声で話を始めたアルに皆驚いてその声の方向へ目を向けた

確かに敵が何処から出て来るのか解らない状況でバラけていては危険だ

そう思つてアルが居る方向へ身体を向けるとアルからは死角になっている位置であの男の上半身が形作られて居るのが見えた

「皆さん！私の方に集まつ「うわああああ！！！！」 なっ！！」

アルを見ていた兵士の中の一人が悲鳴を上げた

あの男が上半身だけ浮いている状態でアルのそばに居た兵士の首を締め上げていたからだ

だがそれだけではない

奴が片手で掲げるように締め上げている兵士がどんどん干からびているのだ

アルの方向へ向かっていた兵士はそのおぞましい光景を見てパニックになり、途端にバラけてしまった

アルの声に反応した者、おそらくここに居る全員がこの光景を見てしまっている

アルも自分のすぐ近くで起こっているその光景を見て動けずにいる各言つ俺も身体が竦んでしまっている

このままではあいつの近くに居るアルが！

動け！動け！！動けえええ！！！！

「てめえら全員皆殺しだああ！！！！！！」

奴が自分から一番近い兵士に向けて手から何かを飛ばした

身体が動いた時は既にそれが逃げている兵士の胴体を切り裂いた後だった。

原作キャラとのファーストコンタクト（後書き）

感想戴けると嬉しいです。

帝国への就職活動（自己アピール）（前書き）

楽しんで貰えると嬉しいです

帝国への就職活動（自己アピール）

身体を足元から砂に変えて姿を消す

連合の兵士を殺しまくった今、紅き翼と共闘するのはほぼ不可能だろう

この状況で俺が選べる選択肢は一人でこの大戦に介入するか、もしくは帝国側に付くかの二つ

介入しなかったら神様から殺されそうだ

それに俺自身は介入する気満々だから介入しないとか言うのを選択肢に入れる気は更々無い

一人の場合を考える

来たばかりの世界を一人で行動するのは流石に厳しいだろう

逆に帝国についた場合のメリットはこの世界に来たばかりの俺の立ち位置を明白に出来ることと、帝国の庇護を受ける事が出来ること

デメリットは連合、というより紅き翼に手札を見せなければならぬということ、最低でも大戦の間は帝国の言いなりになることだが、どう考えてもメリットの方がでかい

大体手札も糞も俺に出来るのは砂を使った攻撃のみだからな一人で介入するとしても見せなければならぬだろう

次に帝国の言いなりになることだが、それは仕方ないだろう何もせずに庇護を受けれるとは思っていない

その為にはこの場で帝国に俺を売り込まなければならぬ

連合を相手にして後ろの帝国兵士に俺の力を見せつける

紅き翼に圧倒的勝利をすれば紅き翼に対しての抑止力として受け入れて貰う事が容易になるだろう

正義馬鹿どもは俺を見付けようとして隊列を乱している

これは好都合だと思ったが、アルビレオが兵士に注意を促した

此れでは一人ずつ殺して行く事は不可能か、もう少し早く動けば良かった

が、兵士はアルビレオに注目してるだけで隊列を戻していない、どうやら次の指示を待っているようだ。

成る程この馬鹿どもは何から何まで指示されないと動けないタイプか其れならばアルビレオがさらなる指示を出す前に殺していかなくては

ほぼ全員がアルビレオに注目しているこの状況で標的にすべき馬鹿はコイツだ！

俺はアルビレオの死角の位置に居る一番奴から近い兵士を馬鹿から良く見える様に掲げてそのまま水分を奪う

この場に居る恐らく全員が俺とみるみる萎んでいく兵士を見ている予想通り兵士達全員にパニックが起こった

どうやら神様は俺が虐めを受けるのを防ぐ為だけに選んだ能力に予想以上の効力を持たしてくれた様だ

逃げまわる敵をドンドン殺していく

まるで一方的に攻撃出来るFPSをプレイしている気分だ

ゲームが上手い人達はこの様な気持ちなのだろうか

嗤える、嗤う、嗤えてくる

こんなに楽しい事は初めてだ

だってそうだろう？

生前20年程生きていてこんなに笑った事はなかった手が止まらない、身体がもつと娯楽を求めようとする

すると突然上半身が弾け飛んだ

何だ？何が起こった？

どうやらナギの糞餓鬼が俺に魔法を放った様だ
ゆるせねえ、許せねえ！赦せねえ！！

俺は今まで散々苦しんだ筈だ！

今度は俺が楽しむ番だろう？

其の楽しみまで奪う気か！？

俺を倒したと思って安心したのか地面に座り込んでいるナギの後ろ
で身体を作り直す

そして油断しているナギに砂を絡み付かせる

ナギは何が起こっているのか解らず逃げようともがくが、もう遅い

だが次の瞬間俺の身体が潰れた

何が起こったのかは直ぐに理解した

「ナギ！！今すぐ撤退だ！！」

詠春がナギに呼び掛けるが腰が抜けてしまっただて立てない様だ
逃がすか！

再び身体を構築する

その途端にまた身体が潰れた

その間に詠春はナギを担いで撤退を始めた

追い駆けようにもしても俺が優れているのは砂の扱いだけ

砂では奴等の速度に追い着けないだろう

「糞がツ！！」

連合の兵士も今の内に逃げ去った様だ

此の俛此処に居たら更に連合から増援が送られて来るだろう

そう判断した俺は後ろで見て居た帝国の兵士に話し掛けた

かなり警戒されていて武器を向けられたが帝国に仕官したいという
旨を伝えた

すると警戒は解かれなかったが兵士の一人が本陣へ駆けて行った

此れで目的達成か

自分の中が満たされる感覚がした

どうやら兵士を殺す事よりも、思い通りに物事が進んだ方が手に入られる満足感が多い様だ

そんな事を思いながら戻ってきた兵士に連れられ本陣へ向かった

・・・よく考えればあの場でナギを殺していたら原作ブレイクし過ぎて世界が此れからどう動くのか解らなくなっていたな

一時の感情で原作知識を持っているメリットを失う所だった

俺は本陣の近くでそんな事を考えていたのだった

目標（前書き）

ナギ視点です。

誤字脱字等ありましたらご指摘下さい

目標

- ナギ side -

あんちよこを用意し奴の方へ向かう

この数秒間にも連合の兵士が殺されている

奴が魔法の射程内に入った

もはや俺はあいつしか見えない、一度でも奴から目を逸らしたら殺される

そう本능が告げている、現に奴が優先的に殺すのは背を向けて逃げる兵士だ

まさに外道

そんな事をすれば真つ先に敵に罵られ殺されるだろう

しかし、それを行うのが誰も止められない圧倒的強者ならば？

もしその光景を一度でも見れば誰も刃向かおうとはしないだろう

ひょっとすれば奴はその事さえも狙って行っているのかもしれない

だが俺が此れだけ恐怖する相手は俺の事が眼中に入っていないように噛い、殺しを続けている

いや、本当に奴の眼には千の呪文の男は居らず他と同じ様に逃げる事も刃向かう事も出来ない弱者にしか映っていないのだ

並の相手なら腹立たしい事この上ない

それが当たり前と思えるあいつは間違はなく別格なのだろう

それに奴の視界に俺が収まっている間は攻撃出来ない

今、攻撃を行っているのは奴だけ
手を出せば殺される

連合の兵士はそんな事を考えながら殺される
俺もそれと同じ思考に陥っている訳では無い
だが誰も反撃していないこの場、それも奴の視界の中で反撃をする
そんな攻撃を避けられない相手とは思えない
殺るなら一撃必殺

後手に回って勝てる相手では無い
そんな事を考えていると奴が背を向けた

今だ！

奴に近付き、確実に避けられない位置、それも後ろから魔法を放つ

殺った！！

手応えあり、恐怖の権化の様な奴はもう居ない
フツと身体力が抜け、へたり込む

これ程恐怖しているとはな

周りの兵士も奴が消えた事により徐々に落ち着いてきたようだ

すると突然身体に何かがまとわり付いて来た

それが全身に絡みつき身体が浮き上がる

逃げようともがくが逃げられない

其れでももがき続けていると殺した筈の奴の憤怒の表情が見えた
何故生きてる？

あの時確かに消し飛んだ筈だ

・・・消し飛んだ筈？死体は？

そうだった、奴は姿を消すことが出来るんだ
死体の確認もせずに殺したと思ってしまった

そんな事を思っていると身体を拘束していたものが急に力を失い俺と一緒に地面に落ちた

何時の間にか眠っていた様だ

周りにはアルと詠春、一人先陣で帝国兵を倒す為に残ったお師匠が居た

するとアルが俺に話し掛けてきた

「心配しましたよナギ？」

「???何の話だよ？俺は確か、・・・あいつは!?!?あいつはどこだ!?!?」

俺はアルに俺が殺される寸前にアルと詠春に助けてもらった事を教えて貰った

アル曰く精神が耐え切れずに気絶したらしい

精神がそんな状態に陥ったのは助かったと思った直後に奴の憤怒の表情を見たからだろうな

命が危なかったのに自分がかかり落ち着いている事に気付く

死を覚悟したのに生きているから戸惑っているのか

それとも奴の憤怒を受けたから一皮向けたのか

どちらなのか解らないし、両方なのかもしれない

何せあんな経験初めてだからわからないな

今、心から生きてる事を嬉しがっている、負けたって言うのに俺は負けて仕方が無いと思っている

明らかに別格、そんな相手だった

だから仕方ない、そう考えてる自分に腹が立つ

何が千の呪文の男だ

あいつの前に立って自分が今まで世間知らずのガキだったと解る
結局俺も弱者だったんだ

・・・だが今回の事で目標が出来た

「なあ、お師匠俺あんちよこ使うのやめるよ」

あいつが俺を敵だと認識させるほど強くなつてやる！

俺はお前と対等の立場になりたい！

待つてろよ・・・

「あ、俺あいつの名前知らねえや」

目標（後書き）

ナギにライバル認定されました
感想頂けると嬉しいです

名前

―テオドラ side―

父上が最近帝国に引き入れた人物が行く先々の戦争で連合の陣営の
悉くを殺しているらしいのじゃ
其れだけならまだしも背を向けて逃げる敵、投降してきた相手まで
殺している様なのじゃ

周りの兵士はそやつが恐ろしくてその行動を止めさせるところか注
意さえも出来ずにいるのじゃ
その様な者など軍を辞めさせてしまえば良いと思ったが聞けばそや
つはかなりの実力があり紅き翼をも退ける事も可能なレベルらしい
のじゃ

実力はあるからその分天狗になっているようじゃの
強き者こそ他の兵士の手本とならねばいかんのに
その事をきちんとそやつに教えねばならん
そやつも真摯に理由を話せば理解してくれるじやろう

妾は護衛を連れて父上がそやつに与えた家に赴いている
通常なら向こうが来るものじゃが父上が何度呼び出し何度同じ事を
言ってもそやつは同じ事を繰り返しているのじゃ
ならば此方から出向いて妾が本気だと言う事を示さなければならん
じやろう

そやつの家の前に着いて驚いた
豪邸とまでは言えないがそれなりの家に住んでいるようじゃ
帝国の一般水準を軽く上回っているだろう

父上から此れほどの家を与えられておきながら言つ事を聞かんとは
なんだか腹が立ってきたのじゃ

護衛の兵士がドアをノックする

するとドアが独りでに空いた

此れは入って良いのかの？

中に入ると目の前に砂埃が立ち上がりそれが人の形を成して行つた

「第三皇女のテオドラじゃ、お主がクロコダイルかの？」

それに答えように目の前にやつが現れた

やつの姿を見た途端に身体が底冷えする様な寒さに襲われた

名前（後書き）

感想、誤字等あれば宜しくお願いします

第二の人生（前書き）

感想とか（r y

第二の人生

あの後国王と会うことになった

紅き翼を退けることができる奴が仕官したいと言っているんだ
直接見てみたいと思うのも仕方ないだろう

帝国の救世主になるかも知れないんだからな

王座の間に通された

護衛の兵士が途端に警戒を強める

しかし国王は動じていない様に見える

まず名前を聞かれた

当然だろう、名前もわからない相手を仕官させるとは思わない
名前が、

「クロコダイルと呼んでくれ」

俺はクロコダイルと名乗る事にした

今までの利益云々考えながら行動したが今回は気持ちの問題だ
生前の名前など使っていたら嫌な事が思い出される

親が付けてくれた名前を大事にする気などさらさら無い

親でさえも俺を疎んでいたのだから

しかもクロコダイルと言う名前が妙にしっくり来る

神様が催眠でも掛けているのだろうが産まれてから死ぬまでの何十年使っていた自分の名前にもはや興味など持てず、クロコダイルと言う名前が本当の名前の様な気さえする

仕官をする条件として衣食住の確保とそこそこの給金を要求したが

すんなり受け入れてくれた

それだけ紅き翼に手こずっていたのだろう

もつと金を要求するのも有りかもしれん

だが此れから少なくとも数年間世話になる職場で金にがめつい奴と思われるのも本意じゃない

此方もある程度は譲歩すべきだろう

その後家の下見かつ街の散策をする事にした
ついでに服などの日用品も買わないとな

まずは服屋に寄った

さて服を買おうか、と思ったところ問題がでた
どれを買えばいいんだ？

生前に自分で服を選んで買った事などなかった

いや、有るには有ったが値段で選んでいた

新しい人生だ、どうせならかつこ良く決めたいものだ

まあ着飾ったところで顔が悪いのは変わらないが

・・・自分で言ってる悲しくなるな

ま、まあ店員に選んでもらおう

金の価値は解らんが服を買うぐらいで無くなりはいしないだろう

「俺に似合う服を見繕ってもらえないか？」

「わかりました、どんな服装にしましょう？お客様が今お召しになられて居る様なタイプにしますか？」

あ、そうだった

俺の服装が死んだ時の服装と変わってたんだ

クロコダイルが着ている様な服装になってるんだ

そう思い鏡を見る

「なっ！マジかよ！」

「ど、どうかしましたかお客様？」

鏡の中に居たのはオールバックの眼つきが悪い青年だった

「い、いや何でも無い」

あの神様がやったのか？

それしか考えられない

何故？悪ふざけなのだろうか？

流石に顔まで変わっているとなると動揺する

店員も不思議がって居る様だ

「どんな服が有るのか全く解らんのだがこの服と同じタイプの服装から選んでくれ」

「は、はい。少々お時間いただきますが宜しいですね？」

店員が服を見繕って居る間に自分の姿を見る

眼つきがかなり、とつても、非常に悪い所を除けば悪く無い顔だ

まあ、前の顔が底辺だったからな

でも前の顔が酷かったことを抜きにしても男前な面構えだ

着ている服はまるつきりクロコダイルが着ていたのと同じ服装だ

服装から考えるにこの顔はクロコダイルをモデルに作ったのだろうか

顔をよく見るとあまり覚えていないが記憶の中のクロコダイルと一

致する

若き頃のクロコダイルってどこか

動揺していた気持ちも収まってきた様だ

見た目は良くなったんだ

悪い事では無い

ただ既に前の顔を忘れてしまっている
此れも神様の仕業なのだろうか
少し寂しく思う

馬鹿にされたりもした顔がなくなってみると悲しいものだ
そう思いながら店員の呼ぶ声に気付き試着室へ入る

一通りの日用品を買い揃えて地図に記された家へ向った
「これは、結構期待されてる様だな」

着いた家はなかなか良い一軒家だった
俺はそのまま家に入ってすぐにベッドに入り眠りに着いた

其れから暫く経ち俺は行く先々の戦場で虐殺を行って来た
紅き翼に当たった事も有ったがもちろん俺が勝った
しかし解せないのがナギだ

奴は俺を恐れている、だがそれ以上に俺と戦う事を楽しみにしている
様な節が有る

まあ、俺に水と覇気以外は効かないから負ける心配はないから構わ
んが

あと、覇気と言えばこの世界には気と言うものが有る
これは覇気とは全く別物、の筈だがあの神様が何かしていない証拠
も無い

まさか気による攻撃を受けてみる訳にもいかんだろう
だから詠春とジャックラカンに関しては警戒しまくっている

次に水だがこの世界は水を使う魔法がある
だがかなりの使い手では無い限り俺を攻撃する事すら出来ないだろう

まあ、この辺りが命に直結する問題か

俺も帝国でそこそ名も売れて来た

其れなりに楽しい第二生を今の所送っている

最近は葉巻にも手を出した

最初は格好付ける為に吸って居たのだが、段々癖になってきた

しかし、面倒なのが陛下が俺に何度も自重しろと言って来る事だが、

まあ結果は出しているし問題は無いだろう

兎に角今は名を売るチャンスだ

原作開始時には紅き翼と同じ知名度を誇りたいものだ

お？

来客とは珍しいな

砂を使って扉を開け中へ招く

そして客の前に姿を見せる

「お主がクロコダイルかの？」

第二の人生（後書き）

風邪引いた

「speech 30%」皇女殿下、私は帝国の為に頑張っていますへ噓へ（前

しんどくて感想に返信出来てません

すいません、治り次第返信させて頂きます

「speech 30%」皇女殿下、私は帝国の為に頑張っていますへ嘘

「これはこれは帝国第三皇女様が何の御用で？」

いやはや驚いた、まさかテオドラが来るとはな

一体何の用だ？

俺のファンと言う訳では有るまい

おそらくは散々注意されても直さない戦場での振る舞いだろう

「単刀直入に言うがの、戦場での虐殺とも言える行為を止めるのじや！お主の行ないは非道極まりない！」

戦争中に人としての在り方など関係ないだろう

それにあれだけ楽しい事を止められるものか

「いやあ、そうまで言われると傷つきますね、僕は帝国の為に働いているだけなのに」

「帝国の為を思うなら戦場では自重するのじゃ！お主の所為で周りの兵士までもが怯えておる」

「怯える？俺の様な奴に怯えるのなら戦場に出ても何も出来ないまま死ぬだけです、兵士の肝が座っていないのは俺の責任では無いように思いますが？」

「貴様！さっきから聞いておればテオドラ皇女殿下になんと言う口の聴き方だ！今すぐ「引っ込んでろ！！てめえは関係ねえだろ！！」っ！」

口出して来た兵士に殺気をぶつける

当初は出来なかったが何度も命のやり取りをしてできる様になった

のだ

テオドラには一切殺気をぶつけていないが、恐怖はしている筈だ

この能力は俺は操作出来ず常時起動しっ放しだ
まあ、操作出来たとしても起動しっ放しだが

それなのに此れだけ俺に向かって来れるとはな

よく見れば少し震えている様にも見えるがそれを隠している

後ろの護衛を安心される為なのか俺に弱みを見せない為か其れとも
皇女の意地なのか

中々に微笑ましいな

・・・しかし、此れも

「何故其れほど頑に拒むのじゃ？訳が有るのじゃろう？話してはくれんか？」

面倒臭くなつて来た

俺は護衛に全力で能力と殺気をぶつける

護衛は全員涙と鼻水、涎、中には小便まで垂れ流して気絶した

「クカカカカ、人の家でお漏らしとは勘弁してもらいたい物ですな」

「な、なんじゃ？お主らどうしたのじゃ！？」

やはり人が恐怖する表情堪らん

またもや顔が酷く歪む

テオドラは高々数人の護衛でここまで来たのだ

こいつらはかなり優秀な兵士なのだろう

俺が少しでもおかしな行動をしたら取り押さえれるレベルの奴らを連れて来た筈だ

だからこそ皇女サマは会話の主導権を自分が握っているつもりで話していた

しかし、そいつらが退場した今、主導権は簡単に俺に移った

「ク、クロコダイル！！このもの達に何をしたのじゃ！？」

「なあに起きて居られると困るのでね」

「ど、どういうことじゃ！？ま、まさか妾を」

「クカカカ、違いますよ、皇女殿下。貴方様の問いに答えようと
思ひましてね」

「と、問い？・・・そ、そうじゃ何故そこまで頑に拒むのじゃ！？」

「だから帝国の為ですよ」

「何度も言わすな！お主がやってる事が兵「その兵が紅き翼が戦場
に出てる事を知れば士気は下がりますよね、何故だと思ひますか？
な、なんじゃと？」

「其れは自分達が勝てない事が奴らの今までの戦績からほぼ確定し
ているからですよ、十中八九紅き翼に殺される事がわかつて居るか
らです」

「その紅き翼を止めるのがお主の仕事じゃろう」そうです、だが紅
き翼は俺を止められないだから今度は俺が連合の士気を下げる役目
を負っているのですよ」な、なんじゃと！？」

「戦場には紅き翼をも凌ぐ敵がいる、しかもそいつは背を向けて逃
げる者ばかりか杖や剣を捨てて投降する兵まで殺している、これで

連合の兵の士気はただ下がりですな」

「ク、クロコダイル。お主そこまで考えておったのか。し、しかし連合の士気が上がるかもしれないぞ？ 非道な輩を討てと、その時はどうするつもりじゃ？」

「皇女殿下、人は自分の中で一番恐怖を抱いている相手には逆らえないものです。その証拠に俺が連合の兵を虐殺しても誰も止め様としません。止めたら最後殺されるのが目に見えているからですよ。俺に殺される事を超える恐怖が無ければ向かつては来ないでしょう。つまり紅き翼には俺に向かつて来なければ俺より大きい恐怖に襲われる、だから向かつて来る訳です。そして結局は自身の事しか考えていない自称正義の魔法使いの馬鹿どもに俺を超える事など出来んでしょう」

「なっ！！」

やれやれ俺も随分と口が回るな

まあ、間違いは言っていないだろう

「ですので皇女殿下「テオドラで良い」・・・テオドラ様、俺にこの件は任せて貰えますか？」

「許せクロコダイルよ。妾はお主を訝しんでおったのじゃ、じゃがこれからはお主を信じようぞ」

「ありがとうございます」

やべえ、信じたよコイツ

俺詐欺師に向いてんじゃね？

俺はそんな事を思いながら倒れている護衛の下の処理をどうしよう

か悩んでいた

「speech 30%」皇女殿下、私は帝国の為に頑張っていますへ噓へ（後

感想（ry

力の誇示（前書き）

風邪治りました

感想（r y

力の誇示

テオドラが国王陛下に説明してくれたのだろう

戦場での振る舞いに何も言ってこなくなった

俺は戦場で思う存分人を殺すことが出来るようになった

まあ今までだつて遠慮など微塵もしていなかったがな

「クロコダイル、アリカ王女に失礼な態度を取るでないぞ」

「わかってますってテオドラ様、俺は黙って辺りを警戒してればいいんでしょ？」

「なら良いのじゃ」

俺は今、テオドラの護衛として来ている

原作でアリカとテオドラが捕まった時のイベントだ

今回も原作通りに進めていくつもりだ

ただ、1つだけ

完全なる世界の連中にすぐに捕まらずにある程度の戦闘を行わなくてはならない

奴らとグルと思われずに、自然に捕まらなければな

「お主がテオドラ第三王女か」

「そうじゃ、早速話を進めるとしようかの」

おつと考えている間に会談が始まっていたようだ
集中し過ぎて周りが見えなくなるのは悪い癖だな
ナギにもその所為で不意打ちを喰らったんだしな

まあ今はそれよりもどのタイミングで投降するかだが

俺が限界まで戦うのはパスだ

連中のなかで覇気を使う者が居れば死ぬかもしれん
まあ死なぬかもしれんがそれをこんな所で試す気は起きない

逆にすぐに投降すればテオドラは俺に何か考えがあると思ってた
がってくれるかもしれんが

アリカはどうだ？

間違いなく怪しむだろう

こいつに怪しまれると後々めんどくさい

ならば連中が声を掛けて来るまで粘る場合は？

例えば「投降すれば一切手を出さない」的な事を向こうが言って来
ればまだやり様があるだろう

その為には向こうの連中が俺を殺すのは骨が折れると思わせれば良
いだろう

しかしあまりにも圧倒的すぎるのも問題だ

向こうだってよっぽどのバカでない限り自分たちを余裕で倒すこと
が出来る奴に投降しろとは言わないだろう

なので一応疲れたふりでもしておこう

そうすれば向こうもその事を伝えやすくもなるだろう

そんなことを考えていたらどうやら奴らもやって来たようだ

「テオドラ様、俺の後ろから離れずをお願いします」

「？何を突然？」

「奴さんにこの場所がばれていたようですね」

「何じゃと！？」

俺以外の誰も気づいていなかったようだ
アリカの護衛の奴らも驚いている

その反応を見て楽しんでいるとその護衛の内1人が消し飛んだ
おそらく魔法の射手だろうか

魔法に関しては畑違いだから何も解らない

「砂漠の宝刀!!」

俺は突然のことで驚いている奴らを尻目に魔法を放った者に攻撃した
足が切断され、支えを失ったからだが地面に落ちる

向こうの奴らも突然のことで驚いているようだ

足を落とされた奴もあまりの恐怖で豚のような悲鳴を上げている

「さあどうした？まだ足が2本ちぎれただけだぞ、かかってこい」

「どうした！？後ろの奴らも撃つてこい!!」

「さあ、夜はこれからだ!!お楽しみはこれからだ!!」

「Hurry!Hurry hurry!!Hurry hurry
y hurry!!!」

やべえ、夜じゃないのに夜って言っちゃった
そんな事を思いながら俺の猛攻が始まった

力の誇示（後書き）

作者はh e l l s i n g大好きです

何故じゃ、何故あ奴は（前書き）

感想（r y

何故じゃ、何故あ奴は

- テオドラ side -

アリカ王女と会談している時に

突然クロコダイルが声を掛けてきた

「テオドラ様、私の後ろから離れずをお願いします」

「？何を突然？」

辺りに敵などおらんじやろう

するとアリカの護衛一人の上半身が無くなった

その方向を見やると魔法を放ったと思われる奴らが居た

「砂漠の宝刀！！」

杖を構えていた奴の足が切断された
やったのはもちろんクロコダイルだ

その者は甲高い声をあげて泣き叫ぶ
後ろに居る者たちも顔が恐怖で歪んでいる

「さあどうした？まだ足が2本ちぎれただけだぞ。かかってこい」

「どうした！？後ろの奴らも撃つてこい！！」

「さあ、夜はこれからだ！！お楽しみはこれからだ！！」

「Hurry！Hurry hurry！！Hurry hurry
y hurry！！！！」

クロコダイルの戦闘を見るのは初めてだ

想像していた以上に恐ろしい

しかし、それよりもクロコダイルの言動が気になる

足が千切れただけ？夜はこれから？

一体何を言っておるのじゃ？

戦場で、この場で足が千切れる戦意を失って当然のことじゃ、死んだも同然のことじゃろう

それなのにまだ掛かって来いとな？それはあまりに惨過ぎる

クロコダイルが言う夜とは？

今の時刻から考えて本来の意味ではないのじゃろう

ならどういう意味か？この殺戮が行われている凄惨な状況で夜はこれからと言っておるのじゃ

つまりはどういうことか？

人が殺されるこの場がクロコダイルにとって夜ということなのじゃろう

あ奴が見ている光景は妾にはわからないのじゃ

紅き翼を倒せるほどの人物が何故今まで無名だったのか？

あの年齢とは明らかに合わない風格は？

倍以上の年齢の兵士を気絶させるほどの殺気、何故そんなものが出るのか？

戦場での虐殺を止めると言ったあの時、クロコダイルが連合の兵士に自分への恐怖を植え付けて帝国の有利に戦争を進めようとしてい

ることが判ったあの時、そんなことをすれば連合から目の敵にされるじゃろう

それなのに奴はその事を一切考えていないように自分の計画を話した奴のことはほとんど知らんし、わからんが恐らくは自分の事などどうでもいいと思っっているのだろう

何故そのような考え方が出来る？

何故そんなに帝国の為に尽くしてくれる？

ひょっとしたら恐怖の話は自身の体験談なのか？

どのような生い立ち、生活をすれば奴のようになるのじゃ？

きつと王族である妾には想像もつかない凄惨な生活を過ごしてきたのじゃろう

何人も何人も殺してきたのじゃろう

しかし妾は軽蔑などせんぞ

いつかお主が心を開いて自分の生い立ちを話してくれることを願っておる

誇り高き皇女は願う

目の前で嗤いながら敵を殺す自分の最も信頼する部下がいつの日か自分に心を開いてくれることを

何故じゃ、何故あ奴は（後書き）

お気に入り登録がめっちゃ増えてて焦ったw
タイトルを

勘違い乙

にしようか

凄惨な過去を持つ男（笑）

にしようか迷った

二つ名(前書き)

感想(r y)

二つ名

完全なる世界の奴らを相手にある程度有利に見えるように、疲れてきているふりをしながら立ち回っていた

アリカの護衛も最初は頑張っていたがあまりにも長く戦闘が続くので気を抜いてやられてしまった

しばらくはその状態が続く居ていたが、

向こうの奴らもアリカの護衛と同じ様に死んでいく奴が増えてきているのが判り、

これ以上は不毛と判断したようで俺が望んでいた通りの話が持ちかけられた

もちろんそれに乗っかるつもりだったが問題はアリカだ

俺はアリカを説得しようと思ったがその必要はなかった

疲れたふりをしながら戦っていたのが完全なる世界だけではなくこちら側にも影響していたのだ

つまりだ、どういふことかというと

「もう充分じゃクロコダイル、こちらの安全は保障されるのならば何の問題もなかるう」

というテオドラ皇女殿下のありがたいお言葉を頂いたのだ

アリカもその意見に同意

お前が疲れを隠しながら頑張っているのは判っている、もう充分だ的な男前な事を言い出してこの場合は投降することが決まった

・・・疲れを隠すつもりなんてなかったんだが、俺はよっぽど疲れ
ている演技が下手なんだな
全然関係ないことを思いながら奴らのいうことに従った

- ナギ side -

罨にはめられ連合からも帝国からも
追われる身となった俺達は辺境を転戦
古代遺跡立ち並ぶ夜の迷宮へアリカ姫救出に向かった

「よお、来たぜ姫さん」

「遅いぞ我が騎士」

「お？ やつとお迎えか」

そこには何故かクロコダイルが居た
「なんで此処にてめえがいんだよ？」

「奴さん数が多くてな、キリがないから投降することになったのよ」

そんなことを言いながら奴は自分にだけ付けられている手錠を手首
の部分で砂にすることで外した

「おいしいいいい！ 外せるのになんで逃げなかったんだ！？」

詠春の言うことは最もだろう

「俺も結構疲れてな、そんな状態で2人連れて逃げるなんて無理だ
つたんだ。それにアリカ王女がお前らが迎えに来るって言い続けて
たんでな、待つことにしたんだ」

そんなこんなで俺達は紅き翼の隠れ家へと着いた

「何だこれが噂の『紅き翼』の秘密基地か！どんな所かと思えば・・・掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してたんだこのジャリはよ」

「何だ貴様、無礼であろう」

「へっへっん、ヘラスの皇族に貸しはあっても借りはないんでね」

「何い？貴様何者だ、クロコダイル！」

「何でしょうテオドラ様？」

「この無礼な男を懲らしめてやるのじゃ」

「このじゃじゃ馬！そいつは卑怯だろうが！」

「Yes , my master」

「マジかよ！こいつってあの渴きの王だろ？」

「渴きの王？何だそれは？」

「お主の二つ名じゃ、渴きと砂の王と呼ばれてるのじゃよ」

「なんとも厨二臭い二つ名だな」

「ん？厨二臭いって何だ？」

「いや、こつちの話だ」

「我が騎士よ」

「だあら、その我が騎士って何だよ姫さんクラスで言ったら俺は魔法使いだぜ？」

ハズかしーな

それにしてもラカンめ、抜け駆けしやがって

俺もクロコダイルと勝負したいのに

「もう連合の兵じゃないのじゃろ、ならば主はもはや私のものじゃ」

「な・・・」

「連合に帝国・・・」

「そして我がオステイア」

「世界全てが我らの敵という訳じゃな」

「じゃが・・・主と主の『紅き翼』は無敵なのじゃろ？」

「ん？ムテキ？」

「余所見とはいい度胸だ筋肉ダルマ！」

「ちょ、タイムタイム！」

「……世界がすべて敵　　良いではないか、こちらの兵はたったの８人、だが最強の８人じゃ」

「ならば我々が世界を救おう、我が騎士ナギよ、我が盾となり、剣となれ」

だから俺は魔法使いだっつーのに・・

「……へ、やれやれ相変わらずおっかねえ姫さんだぜ、いいぜ俺の杖と翼あんたに預けよう」

こうして俺達は世界をすべて相手に反撃を開始した

二つ名（後書き）

いやー、此処のシーン書くために久しぶりに原作読んだんですが
今までうる覚えで書いてたから所々間違ってる部分がありました
原作読みなおしながら修正していきたいと思います

戦争の後に（前書き）

感想（r y

戦争の後に

「あー、暇だー」

「暇だな」

今、俺はナギとラカンと三人で居る

俺たちは頭脳労働担当が敵と判断した奴らを襲撃してつづす役目を負っている

今これだけ暇なのはその判断を貰うのを待っているからだ
俺としてはそっちが良かったのだがテオドラ曰く

『お主は今まで頑張つて、いや頑張りすぎたのじゃ、大丈夫じゃ皆まで言うな妾は全て解つておる。妾もそんなお主にこれ以上目の前の相手に敵か味方が疑わせたくはないのじゃ』

との事

一体何の話なのかさっぱりわからんが皇女殿下がそこまで言うのだ
従つておくことにしたのだ

「おいおい、幾らなんでもテメエらダレ過ぎじゃねえの？」

「暇なもんは暇なんだよ、仕方ねーだろ」

「次はお前が話題振れよクロコダイル、俺たちは色々暇つぶしの提案とか出したぜ」

「ラカン、提案つってもお前らが言い出したのってしりとりとかじゃねえか。しかもそれに最初に飽きたのもテメエらだろうが」

「だってお前強いんだもんよー、どんだけ語呂豊富なんだよ」

生前友達なんて居なかったから一人でしりとりしてたりしたんだよ
・・・悲しくなってきた

「ほら、さっさと話題プリーズ」

「ったくうぜえ、だったらお前からこの戦争終わったらどうすんだ？」

「そんなの考えてねえよ、お前は？」

「俺もナギと同じだ」

「・・・話題振った意味がねえじゃねえか」

「いや、お前は話してないだろ」

「そうだよ、お前言いだしっぺなんだから言えよな」

やべえ、こいつらすげえム力つくわ

「わかったよ、なら言ってる。俺はな旧世界で何かしらの活動するつもりだ」

「旧世界で？なんでだよ？」

「こっちで英雄気取るのも良いがな、俺はちょっとした夢が有ってな」

「その夢って何なんだ？」

夢って言っちゃったが

ただ単に生前には無かった力で自分がどこまでやれるか試すつもりなだけだ」

「・・・昔は何も出来なかったんだ」

「世間に散々忌み嫌われてきたんだよ、家族にもだ。なに珍しいことじゃねえ、どこにでも有る大したことない理由だよ」

ヲタクっただけで虐められて生きてきたんだ

カツアゲどころじゃねえ、殴られるなんて日常茶飯事だった先生に言っても解決せずに卒業するまでそれは止まなかった

「それが今はどうだ？あろう事か紅き翼にも並ぶ砂の王だぜ？昔は出来なかったことがたくさんあった、だが今はそれが出来るんじゃないかって気に成るんだよ」

今度は俺が踏みこむ立場に

「・・・」

俺の話をして二人は黙って聞いていた

垣間見える闇（前書き）

感想（r y

垣間見える闇

- ラカン side -

「旧世界？なんでだよ？」

ナギが尋ねる
そりゃそうだ

帝国の英雄が旧世界で何をするんだ？

「こっちで英雄気取るのも良いがな、俺はちょっとした夢が有つてな」

「その夢って何なんだ？」

俺も気になって尋ねた

あらゆる戦場で嗤いながら兵士を惨殺し続ける男の夢だ
気にもなるだろう

クロコダイルは少しの間考えるそぶりを見せ、やがて

「・・・昔は何も出来なかったんだ」

男の告白が始まった

「世間に散々忌み嫌われてきたんだよ、暴力など当たり前、だれも止めようとせず、家族には嫌悪する事を隠そうともせずに俺をゴミのように扱った。なに珍しいことじゃねえよ。どこにでも有る大したことない理由でだ」

家族にも嫌われる

相当な事にも思える

が、この男は珍しいことではないと言いつつ

それにしても大したことない理由でこいつに暴力を振るう
そんな事をすればこいつなら間違いなく殺すと思うが
こいつはそれをしたならばそこで収まっていただろう
それをしなかった

俺は2つの可能性が思い浮かんだ

1つはこいつがその頃はまともだった

もう1つはその頃には反則ともいえる能力が無かった

あるいは両方が

俺は考えた

もし、あの能力が先天的な能力ではないとすれば・・・

「それが今はどうだ？あろう事が紅き翼にも並ぶ砂の王だぜ？昔は
出来なかったことがたくさんあった、だが今はそれが出来るんじゃない
かって気に成るんだよ」

こいつは一体どんな闇を抱えているというんだ

葉巻に火を付けながら話を続ける友人に俺は一体何ができるのか？

迷推理（前書き）

感想（r y

迷推理

- ナギ side -

クロコダイルの話が終わった後しばらくしてジャックが俺を外に連れ出した

「急にどうしたんだ？」

「ナギ、あいつの話どう思った？」

「クロコダイルのか？ そうだな・・・あいつに暴力振るうなんてよっぽど度胸が据わった奴らなんだな」

そう答えるとジャックは呆れ顔で

「だからお前はガキなんだ」

「何だと？」

「いいか？ 考えてみる？ 暴力を振るわれてもそれを上回る力を見せつけばそれで収まっていた。だが奴はそれをしなかった」

確かにあいつだったら殺して終わりのような気がするけど話はそれで終わっていなかった

「何か理由があるのか？」

「ああ、俺は2つほど考えている」

「1つはクロコダイルがその頃はまともだった」

「もう1つはその頃にはあの反則ともいえる能力が無かった」

「あるいは両方が」

「俺はまともなあいつが思い浮かばないんだが？1つ目は無いんじゃないか？」

少しばかりふざけて答える

「いや、俺は1つ目と2つ目の両方だと考えている」

「なんでそう考えるんだ？理由があるんだろ？」

「ああ、あいつには悪いが俺はクロコダイルほど歪んだ性根が元々だったとは考えられない。あいつの歪み具合は尋常じゃねえ、もはや異常だ」

・・・確かに言われてみればそうだ

「口ではかくく言っているが実際は俺らが想像も出来ないような生活を送ってきたんだろ？」

「そして2つ目だが俺はあんなバケモンじみた能力が先天的な物とは思えねえ、それにあいつは『暴力など当たり前』と言ったんだ」

「つまりだ、あいつはその時はまだ能力を手にしていなかった」

「なぜならあの能力があれば暴力を振るおうにも当てられないしな」

「なるほど」

そうだった

あの能力には攻撃が効かないんだった

その時に能力があつたらあいつがあれだけ歪む事は無かつたんだ

「なら一体どうやってあんな能力を？」

「その答えはこの間テオドラに聞いたあの話がヒントになる」

「あの話って・・・クロコダイルが連合の兵士を見せしめのように殺す理由か？」

「そうだ、俺はあいつが連合に恨みを持っていると推測する」

「？話が見えねえんだが？」

「それを踏まえて俺はクロコダイルの能力は連合に属する何らかの組織に人体実験をされた結果だと考える」

「そんな・・・」

声が思うように出なかった

そんなことはない！

そう断言したかった

だが、無理だった

なぜならこの戦争で色々な人間の黒い部分を見てきたんだ
あり得ない話ではない
それに

「・・・辻褄が合った」

クロコダイルの過去、能力の真実がわかってしまった
「出来る事なら知りたくなかったぜ」

「ああ、俺もだ。出来る事なら奴の口から聞きたかった」

だがそれは無理だろう

それだけの事をされてきたんだ
人を信用できないだろう

「あいつの、クロコダイルの家族の奴らはなんで止めてやらなかったんだ!!」

ジャックの悲痛な叫びが響く

「おそらくそいつらがその組織に引き渡したんだろう」

俺は自分でも驚くほど冷静に分析する

心の奥でどす黒いものが渦巻く

「畜生、畜生、こんな、こんな事があって良いのかよ。あいつが、クロコダイルがあまりにも・・・」

ジャックが目には涙をためている

目の前で大の大人が泣きかけている

しかし、俺はそれを馬鹿にする事が出来なかった

「ジャック、俺たちがあいつを支えてやろうじゃないか」

「ああ！当たり前だ、仲間として、友人としてあいつが心から笑える為に!!」

なあクロコダイル

もつと俺たちを頼ってくれ

お前はどっと思ってるのかしらねエが

俺たちはお前を友達だと思ってるぞ

迷推理（後書き）

ラカン「証明完了」ドヤッ

いつかはつぐんだ(前書き)

感想 (r y)

こっちはばつぐんだ

下部組織を散々潰して回ったのち遂に敵の本拠地が墓守り人の宮殿である事を突き止めた

俺は知ってたから特に何とも思わなかったが

「不気味なくらい静かだな奴ら」

「なめてんだろ、悪の組織なんてそんなもんだ」

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊準備完了しました」

「おう」

ナギたちはすでに戦闘準備を整えたようだ

俺は葉巻を吸いながら墓守り人の宮殿を眺めている
すると隣にラカンがやってきた

「なんだ？お前も吸いたいのか？」

「ああ、もらっぜ」

俺は葉巻を取り出し、キャップを噛み千切った
そして火を付けラカンに手渡す

それを吸って一言

「なあ、クロコダイル」

「なんだ？」

俺はラカンの方へ顔を向ける
後ろではナギがサインを強請られていた

「今まで色々あったが、俺に出来る事があつたら何でも言ってくれ
や」

「は？いきなり何言つてんだ？」

マジで何言つてんだこいつ

その時ナギが俺たちに集合の号令を掛けた

「ダチとしていつでも力になってやるって事だ、俺はそろそろ行く
ぜ」

・・・あいつ今なんつった？
ダチ？

友達つてことだよな？

この俺と？

俺なんかと友達になつても楽しくないだろうに

何企んでんだ？

俺と友人になつた場合のラカンのメリットを考えながらナギの号令
に従い集合する

「よおしつ野郎ども、行くぜっ！！」

「やあ『千の呪文の男』また会ったね、これで何度目だい？『渴きの王』は初めましてだね、僕達もこの半年で君達に随分数を減らされてしまったよ、この辺りでケリにしよう」

人形が何か言っているが耳に入らない

冷汗が止まらない

今、俺はどんな顔をしているのだろうか

人形の周りに居る4人をもう一度見る

火を纏っている者

雷を纏っている者

フードを深く被っている者

そして、

足もとから水を召喚し、飛沫を撒き散らしている者

・・・・援護に回ろう

-フエイトside-

こいつらは強い

かなりの使い手をそろえた此方がかなり押されている

その上渴きの王が上手いこと援護に回って……援護だと？

何故奴が援護に回っているんだ？

情報によれば渴きの王はバリバリの前線タイプだったはず

実際奴の援護はこちらとしてもかなり恐ろしいが味方にも当たりそうだ

慣れない援護を何故？

その時視界の隅で飛び散った水飛沫を捉えた

それを避ける渴きの王

どうも仲間の戦闘よりも飛び散る水飛沫に目が行っているように見える

なるほど”渴き”の王か

なかなか良い二つ名じゃないか

「『渴きの王』を狙え！！奴は水が弱点だ！！」

それを聞いた渴きの王はまるでこの世の終わりのような顔をしていた

いつかはばつぐんだ(後書き)

今回も短くてすみません

ド忘れによる弊害（前書き）

感想（r y

ド忘れによる弊害

- ラカン side -

「『渴きの王』は水が弱点だ!!」

戦闘の最中に聞こえた声

「は？」

俺たちは皆一瞬呆けた

ただ一人クロコダイルを除いて

あいつの顔は文字通り蒼白になってこれから自身に降りかかることを想像し、恐怖している

この反応を見る限りガチだ

「どきやがれ!!」

俺は水使いの奴を倒そうとするが周りの奴らに阻まれる

周りを見るがナギ達も同じ状況のようだ

今、こいつらは俺たちを倒そうとはせず、水使いがクロコダイルを倒すまでの時間稼ぎをしている

畜生！

こういうのが一番厄介なんだ！

そうしている間に水使いが水をすさまじい勢いで弾き出し、それがクロコダイルに向かっていく

「クロコダイル!!」

呼びかけたことでやっと我に返り
今の自身の状況も把握したようだ

「糞が！！最硬絶対防御・守鶴の盾！！！！！！」

クロコダイルが狸のような姿をした物を自分の体と水の間に作り出す物々し過ぎる技の名前からして自身が出来る最大の防御なのだろうしかし、それもやはり砂で出来た物だったようで、瞬く間に泥になり、水はその泥と共にクロコダイルにぶち当たった

「お前らよくもクロコダイルを！！」

ナギの声と同時に俺たちは反撃を開始した

仲間をやられて怒り心頭な俺たちは奴らをあつという間に倒し、ナギは逃げるアーウェルンクスに追って行った

「おい！！しっかりしろ！！」

俺はずぶ濡れで倒れているクロコダイルに声を掛ける

「・・・あー、良かった。俺生きてるわ」

「ったく、ビビらせやがって」

遠目で見ていた詠春達も安心したようだ

「スマン、あの技は本来硬度が高い鉾石を圧縮して盾にする技なんだ、その環境さえあれば何とかなったかもしれない。まああれを出したお陰で泥がクッションになったから助かったんだが」

「そんな技あの一瞬で出せるわけねーだろ、あーもういい心配して損した。ほら、ナギの所に行くぞ」

俺はこいつを起こしてナギの所に向かった

ナギ達の所にたどり着いた時にはナギが奴を宙吊りにしていた

「フ・フ・フ・まさか君はいまだに僕が全ての黒幕だと思って
いるのかい？」

「なん・だと」

その瞬間

奴ごとナギを何かが貫いた

「!？」

「ナ、ナギイツ!!!」

「誰だ!？」

敵を視認した瞬間

またもやそれが放たれた

「いかんッ最強防御!!」

「ぬううつ!!」

ゼクトと俺が止めようとする

が、ゼクトの防御が破れ

俺は両腕が弾け飛んだ

俺が吹き飛ばされながら見たのは

「なっ！！」

俺より遅れてやってきたクロコダイルが避けられずに巻き込まれる
光景だった

「ぐっ・・・バカな・・・」

「まさか・・・アレは・・・」

そいつの姿を見て思った
こいつには絶対に敵わないと

s i d e o u t

「待てコラてめえっ！！！！」

「任せなジャック」

「い・・・いけませんナギ！その身体では」

周りで声が聞こえる

ラカンの言う通りに素直に着いて来たのが間違いだった

俺のバカが！

高々水と泥浴びたぐらいで造物主の事忘れるなんて
いや、今は早く起きねえと

造物主倒してもっともっと名を上げなければ
「痛っ!!」

かなりの激痛が走った

もう一度起き上がろうとして気づいた

今までの体とは何かが決定的に違うと

恐る恐る今も痛みが走り続けている部位を見てみると

「……嘘だ、嘘だ嘘だ！嘘だあああああ！！！！！」

左腕がねえ

肘より少し先からが消えている

それを見た所為なのか

それとも叫んだ所為なのか

先程よりも大きくて鋭い痛みが体を駆け巡った

「ああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！」

「クロコダイル！？そこに居……ツツ！あなた腕が！！」

もはや自分の声すらも聞こえない

「クロコダイル！落ちていて下さい！！ああ、血がつ！詠春！！包帯を！！！！詠春！！！！詠春！！！！！！！！！！」

俺は気を失った

ド忘れによる弊害（後書き）

GWキターーーーー

繋がった勘違い

「知らない天井だ」

「お？起きたか」

そこには筋肉ダルマが居た

「ここは？確か左手が消し飛んで」

左手を見るが、手首辺りから先が何も無かった

「病院だ」

「そうか、あの後どうなった？」

「お前が気絶した後の話だがな、造物主は倒したが、ゼクトが・・
」

「そうか、死んだか」

原作通りに進んだか

「そうだがお前落ち着きすぎじゃないか？」

「いや、流石にもう泣き叫んだりはしないだろう、それに前にもつと酷い事になったんだし」

なにせ一度死んでるからな
トラックに撥ねられて地面に叩きつけられたんだ

左手が無くなったのはとても痛かった

この体で初めてもらった攻撃
でも今叫ぶ事は無い
もう落ち着いた

「てめえはそれで良いのか？」

「ああ？なにが言いてえんだ？」

いきなり何なんだ？

「感情無理矢理押さえ込んでんじゃねえって事だ」

「何を言って・・・」

「本当に納得してるのか？」

納得・・・

出来る筈がねえ

自分の四肢の内の一つが消し飛んだんだからな
確かに無理矢理納得しようとしていた

だが

「ラカン、てめえ何様のつもりだ？今回の事でも結局何も失っていないお前には言われたくねえんだよ！」

テーブルに左腕を叩きつけて怒鳴る
そうだ、こいつは確かに腕を失った
だが、今は既に元にもどっている

そんな奴に俺の気持ちが解るものか！

「言っただろう、俺はお前のダチだ」

「は？」

一瞬何を言われたのかわからなかった

「確かに俺はお前が言うように今まで何も失ってなんかいないかもしれない、お前の人生を理解することは出来ない。だからと言ってダチが苦しんでるのは理解できないわけじゃない！今まで一人で過ごしてきた事は知っている、だが今は俺がいる！俺たちがいる！！お前が俺をどう思っているのかは解らないが俺はお前の事をダチだと思っている。」

「お前は何を言って・・・」

心の奥で何かがせり上がって来るのを感じる
それを必死に押さえ込む

「つまりだ、何が言いたいかと言うとだな」

「そ、それ以上言・・・」

今まで一人で孤高を気取って生きてきた
虐めから、孤独から自分を守り通して生きてきた
自分に嘘をつき続けていたら
いつの日か本当になると信じて
今まで積み上げてきた偽りの強さ
それが、

「俺を頼れ、ダチに頼りにされてんだ幾らでも手え貸してやる」

この一言で崩壊した

心の底からせり上がってきたのは涙だった

「あ、あああ」

一人は嫌だった

一人ぼつちは寂しかった

昔は相手を平伏させる力なんて望んでなかった

ただの一人だけでもいい

愚痴を聞いてくれる

電車の待ち時間メールの相手をしてくれる

虐めを庇ってもらわなくても良い

休日に遊ぶ約束を立ててキッチンと待ち合わせ場所に来てくれる友人が欲しかっただけなんだ

「悩みがあれば俺に言え俺も一緒に悩んでやる、楽しい事があれば俺も誘えもつと楽しくしてやる、大丈夫だ。何があっても俺だけはお前の友達だから」

ラカンはその言って俺を抱き締めた

涙や鼻水が付くのも厭わずに

人生二度目にして初めて出来た友達

普段から筋肉ダルマと罵ってきたウザい奴

そんな筋肉ダルマは格好良すぎた

そしてその生き方は俺には眩し過ぎた

- ラカン side -

「知らない天井だ」

「お？起きたか」

クロコダイルが目を覚ました

「ここは？確か左手が消し飛んで・・・」

俺も釣られて左手を見るが、手首辺りから先が何も無かった

「ここは病室だ」

「そうか、あの後どうなった？」

俺は意を決して言った

「お前が気絶した後の話だがな、造物主は倒しただが、ゼクトが・・・」

ゼクトはいいつの過去の事を俺とナギから聞いてからこいつの事をかなり気にかけていた

クロコダイルもゼクトには心を開いていたように見えた

そんな相手が死んだ

こいつを襲う精神的苦痛はどれ程のものなのだろうか・・・

だが、こいつは有ろう事か

「そうか、死んだか」

まるでゼクトが自分とはまったく関係のない存在のような返答をした
俺はたまらず聞き返す

「そうだがお前落ち着きすぎじゃないか？」

こいつはクールな奴だがこれほどまでに冷たかったのか
俺は友人になりたいと思って居た相手の評価を下方修正した

その時クロコダイルが口を開いた

「いや、流石にもう泣き叫んだりはしないだろう、それに前にもつ
と酷い事になったんだし」

一瞬何を言われたのか解らなかった

クロコダイルの価値観、それは自分ではとても理解することが出来
ないものだと思えて知った

自分の友が、仲間が還らぬ人となる事に流石にもう慣れたと言う
まるで子どもが注射の痛み慣れたとも言つように

俺では想像もつかない人生を過ごしている

ナギにはそう言った

帯びる雰囲気そのものが変わってしまうほどの虐め、家族に売り飛
ばされその先で人体実験
想像できないほど酷い人生

されど理解することは出来る

嘗てこの身は奴隷でそれなりに波乱を経験してきたのだから
そう思っていた

自分ならこの青年に救いの手を差し伸べてやれると

だが、自分は本当の世界の闇というものを知らないのだと知った
奴隷という地位を経験したのだから苦勞人同士お互いを解り合える
そんな風に思っていた自分が恥ずかしい

友人の死を何度も、慣れるほどに経験したばかりかもっと酷い事ま
でも体験した

それよりも酷い事とは一体・・・

正に想像もつかない人生

もはや心が折れそうだ

だが解った事もあった

「てめえはそれで良いのか？」

「ああ？なにが言いてえんだ？」

想像出来ない様な人生

ナギにそう言ったが他人の人生なんて想像出来る訳ねえ

他人の人生談聞いてそいつが今まで過ごしてきた人生を知る事が出
来てもその人生を完璧に理解なんて出来ない

そいつとは自分とは価値観も何もかも違う所詮他人だからだ

でもその話を聞いてその時にそいつが何を思ったか想像は出来る
これは想像だが

「感情無理矢理押さえ込んでんじやねえのか？」

「何を言って・・・」

「本当に納得してるのか？」

納得出来る筈がねえよ
仲間が死んだんだから

確かに俺も無理矢理納得しようとした

英雄になった俺たちが悲しんでばかり居るなんて事はゼクトは望んでいない

そう思っていた

だが納得出来なかった

もっとあいつと馬鹿やってればよかった、もっと色々話しておけば良かった、こんなに急に居なくなるなんて思ってた居なかった
そう考えてしまう自分が居る

「ラカン、てめえ何様のつもりだ？今回の事でも結局何も失っていないお前には言われたくねえんだよ！」

クロコダイルが叫ぶ

何も失っていない

その言葉が一体どんな意味を持っているのか、どんな思いが籠められているのか

放った言葉は深すぎて理解できない

相手に理解させるつもりが有るのだろうか

そう思ってしまうほどに脈絡のない言葉

だから御相子だろう

俺も脈絡なく自分の思いを言う

「言っただろう、俺はお前のダチだ」

「は？」

流石に脈絡が無さ過ぎたのだろうか

だがクロコダイル、お前の言葉も同じようなものだったんだぜ

せめて意味だけは伝えないと

「確かに俺はお前が言うように今まで何も失ってなんかいないかもしれない、お前の人生を理解することは出来ない。だからと言ってダチが苦しんでるのは理解できないわけじゃない！今まで一人で過ごしてきた事は知っている、だが今は俺がいる！俺たちがいる！！お前が俺をどう思っているのかは解らないが俺はお前の事をダチだと思っている。」

「お前は何を言って・・・」

心の奥で何かがせり上がって来るのを感じる
それを一字一句違わずに伝える

「つまりだ、何が言いたいかと言うとだな」

「そ、それ以上言・・・」

今まで一人で生きてきた

どんな事に対しても心を強く持つて生きてきた
虐めから、孤独から自分を守り通して生きてきた

今まで耐え忍んで生きてきて

流石に我慢しすぎたのだろう

心の奥底に押し込んだ感情

それを呼び戻せると信じて

「俺を頼れ、ダチに頼りにされてんだ幾らでも手え貸してやる」

「あ、あああ」

俺は目の前の友人を力一杯抱き締めた

「悩みがあれば俺に言え俺も一緒に悩んでやる、楽しい事があれば俺も誘えもつと楽しくしてやる、大丈夫だ。何があっても俺だけは

お前の友達だから」

普段ならすり抜けるその体
しかし触れることが出来た
病室には嗚咽が響き続けた

繋がった勘違い（後書き）

主人公心を開く巻ですね

ラカンと論点ずれてる時点で屑ですね

当初からラカンに友人ポジションに就いてもらう予定だったので感想に

主人公が簡単に心を開いて真人間に成るような展開は止めて欲しいというのが在って非常に焦りました

個人的にも良い子ちゃんを書きたくないし

これだけ歪んだ主人公が真人間に戻ることは不可能だと思っていたので真人間云々は問題無かったのですが

簡単にという部分でハードルがかなり上がりましたww

ひょっとしたら主人公が誰とも一切慣れ合わずに過ごすことを希望されていたのかもしれませんが、すいませんその展開は無理です

まあ、なにせよ今回の話は自分でも結構良いんじゃないかな？って思っています

外道成分大嫌い、原作キャラハーレム以外の展開は認めない、もはや原作以外認めんっていう読者様はいらっしゃらないとは思いますが、もしいらっしゃるならこの辺でハッピーエンドされることをお勧めします

話変わりますが次の更新は遅くなると思います

最近忙しくなってきたり何時になるかは判りませんが出来るだけ早く更新するつもりですのでどうかご勘弁を

言葉の意味を考えて話そう（前書き）

忙しくて中々執筆できませんでした

言葉の意味を考えて話そう

あの後、退院して直ぐに帝国で式典が行われその場で騎士の称号を貰いサー・クロコダイルと名乗ることになった

そして今はテオドラが褒美をくれると言うのでテオドラの私室に居る

「妾の騎士クロコダイル、お主何か欲しい物はあるかの？」

欲しい物ねえ

特に思いつかないな

ヘラスの王族に入れてくれとかは駄目だろうか

．．駄目だろうな

金と言うのが一番無難だろうか
ふと左腕を見た

・テオドラ side・

珍しく悩んでおるの

強欲なクロコダイルの事だから金と即答するのかと思っていたが

．．まさか王族に入れろなどとは言わんじやろうな

いや、妾としてはその時期早々というか
心の準備がまだというか

そもそも王族という地位が欲しいだけであって、妾の事など微塵も
興味ないのかもしれん

だったら仮契約位で一旦満足させて置いてそれから真意を図るとい
うのも……

……駄目じゃ、此奴がそんな事で騙されるとは思えないし、それ
に地位目当てだったとしても別に……

「テオドラ様、宜しいですか？」

「あ、ああ良いぞ申してみよ」

わ、妾は何を考えておるのじゃ
クロコダイルがそんなこと言うはずがないのに

「義手と言いますか鉤爪が欲しいのですよ」

「義手？鉤爪とな？」

義手なら判るが鉤爪？

「ええ、今この身は騎士なので失った左腕の分の攻撃する手段が欲
しくて、デザインは既に考えているので」

自分への褒美に仕事の道具を頼むとは

妾はクロコダイルの事を少々勘違いしておったようじゃ

「成る程、判ったのじゃ」

「有難うございます」

強欲と思い込んでしまっていた自分が恥ずかしい

「妾は王族に入れてくれとでも言つのかと思つてひやひやしたぞ」

「俺もそれは流石に駄目だろうと思ひ自重しましたよ、さつきも言つた様にデザインは決めているんでその通りをお願いします。ではこの辺でお暇させて貰います」

そう言つてクロコダイルは出て行つた

．．．え？

自重した？

本当は王族に成りたかつた？

頭の中でさつきの言葉が反芻される

「ク、クロコダイルの事じゃから。きつと地位目当てに違ひないのじゃ」

彼奴は強欲だから

そう言いかけて先程クロコダイルが強欲という評価を修正した事を
思い出す

「いや、彼奴は意外と誠実な男だったのじゃ。
え、じゃあまさか本当に？」

頭が混乱する

思考の堂々巡りが続き答えが出ない

だ、誰かに相談しなければ
こんな事相談出来るのは妾より奴を知っているあの男だけ

「ジャックを、ジャック＝ラカンを呼ぶのじゃー!!」

じゃじゃ馬姫の叫びが宮殿に響いた

言葉の意味を考えて話そう（後書き）

フラグが立ちましたね

主人公は自分が発した言葉の意味が判っていません

次の更新ですが夏休みくらいになるかと

全ては此処から始まった(前書き)

感想等 (r y)

全ては此処から始まった

俺は人を探している

正義云々で動く様な奴ではなく

それなりに強い

金で動く人物で

それなりに信用出来そうな奴

いやまあ、信用出来るかどうかなんて正直会って見ないとわからんが
だが原作の中でそれっぽい奴はいた

「それがお前だ力ゲタロウ！」

「・・・は？」

- カゲタロウ side -

酒場でいきなり声を掛けられ驚いた

それも相手はあのサー・クロコダイルだ

取り敢えず口を開こうとすると

「詳しい話をするから着いて来い」

と鈍く光る鉤爪を突き付けられ有無を言わさず連れられた
道中に何を言っても

「詳しい話は後だと言っただろ」

と鉤爪を押し付けてくる

観念して大人しく着いて行くと一軒のそれなりに大きい家に着いた
聞けばこいつの家だという

「さあ入れ」

入っては駄目だと判ってはいる

しかしだ、こいつからは逆らえない雰囲気を感じる
何というか恐いのだ

このまま此処にいてもこいつの機嫌が悪くなるだけと判っているか
ら大人しく入ることにした

「さあ、此処まで着いて来たんだ。説明してくれ」

「ああ、俺と一緒に旧世界に行くぞ」

まるで決定事項の様に話す

だがそこは一先ず置いておくとして

「旧世界？何故だ？というより俺とあんたは初対面の筈だよな？」

「旧世界で俺は自分がどこまでやれるか試したいからだ。そして俺
とお前は初対面だ」

自分を試すだと？

そんな事なら

「他の奴でも良いだろう。サー・クロコダイルが旧世界への付き添
いを探していると言えば名乗りを上げる奴らが幾らでも出てくる」

「他の奴らが、というより俺が旧世界で色々やらかすという事が知
られたら駄目だ。だからそれはしない」

ますます訳がわからなくなってきた

あと、聞き逃しそうになったが

「やらかすって何をだ？」

その口ぶりじゃ悪事を働こうと思われても仕方ない

「金儲けだ、俺は確実に金を儲ける事が出来る。例えば価値が一気に上がる土地を知ってたりな」

．．．何故知っているかは置いておこう

「だったら何故俺なんだ？それにそんな事が判っているなら一人でやれば良いだろう」

俺とこいつは初対面

それに一人でやった方が取り分が多いからいい筈だ

「別にそれなりに優秀で裏切らない奴なら誰でも良い。

だが、そいつが裏切らないかどうかなんて判らん。だから裏切った場合、それ以前に断った場合に殺したら俺が疑われてしまう近しい奴は駄目だ。

その点お前とは初対面だ。お前を殺しても疑われ辛い、酒場にいた奴らが俺がお前を連れて出た事を覚えていたとしてもだ、俺にはお前を殺す動機が無い、

何なら遺体をお前だと判別出来なくすれば尚良し、それどころか俺の力で死体すら残さない方法もある、

それに俺はサー・クロコダイルだ。酒場にいる奴らの意見よりも俺の事を皆信じるだろうしな。この家に俺とお前が入ったのを見た奴もいるかもしれんが、家からは死体も肉片も血液の一滴すら出なければ何も出来まい。

それにだ、多分お前は断らない。というより断れない。お前、俺より恐い奴に会った事無いだろう？」

．．どうやら俺はかつて無いほどの生命の危機にさらされている様だ

初対面でこいつの事は殆ど知らないが、これだけは判る

こいつはやると言ったら殺る

というより俺は何をやられるのだろうか

近しい者が断つても殺されると言う事は相当ヤバイ事なのだろう

取り敢えず、今の俺に出来るのは

「．．．あんたが一人でやらない理由は？」

この悪魔の話を聞く事だけだ

．．．悪に屈したとも言える

「そりやお前、一人で出来ない事でも二人なら出来るって言うのは建前で、共犯者がいた方が心強いだろ？」

．．．前言撤回

悪魔では無く魔王だったらしい

「．．．共犯って、何をするんだ？」

するんだ？と言ったのはこの魔王にお前に命令されたからやるのでは無く、俺の意思でやるというお前に屈した訳じゃ無いというアピールだ

．．．それが伝わったかは置いておこう

「先ずは魔法で麻薬を隠して密輸でもして金を稼ごうと思う」

．．．おい、待て

「その麻薬は？」

「麻薬を取り扱ってるマフィアでも襲えば良い、大丈夫だ皆殺しにすれば目撃者ゼロ。一般人にバレたからオコジヨ刑って言う事にはならない」

オコジヨどころじゃ無い刑罰が待っていると思うが

．．．流石に止めたほうが良いな

「それはちよつと、やり方を変えないか？」

「．．．それもそうか、よしやり方を変えよう」

良かった、こいつにも良心と言う物が少しは

「効率が悪いな、そのマフィアを乗っ取ってもっと扱う麻薬の量を増やした方が良いな。しかしどうやって増やそう」

またもや前言撤回

良心何て物欠片も無かった様だ

せめて今日が人生最大の厄日でありますように
これ以上の厄日など死ねる

と、そう言えば

「何で価値が上がる土地なんて知ってるんだ？」

「．．．占いだ」

全くもって前途多難だ

全ては此処から始まった（後書き）

思い立ったが吉日
それ以外は（ry

カゲタロウの憂鬱（前書き）

最悪の職場

カゲタロウの憂鬱

俺はテオドラに適当な理由をつけ旧世界に行くことを話した

最初は渋っていたが結局向こうが折れ、俺は旧世界行きの許可を貰ったその日にカゲタロウを連れて帝国から離れた

向こうに着いて早速二手に別れてチンピラを片っ端から恐喝して金を搾り取った後、帝国で購入した記憶を弄り変える薬で記憶を消去

これを繰り返すと二人分の飛行機代位は軽く出せる金がすぐに出来た

そして飛行機でコロンビアへ飛び、そこで幾つもある麻薬組織を片っ端から痛めつけ、乗っ取った

その結果、国内の全ての麻薬組織を束ねた巨大組織バロックワークスがこの国に入って僅か一月程で完成した

そして首都ボゴタの土地を片っ端から地上げする作業を始めた

金と土地、家を用意してそいつらを移住の交渉をして相手が渋った場合数々の嫌がらせを行い、ボゴタの土地のほぼ全てを手に入れた

この旧世界に來た時に将来大きくなる都市や、金がかなり動く出来事、原作で起きるイベントなどを覚えている限りノート書き記した

このノートのおかげで次にどうすれば良いのか迷わないで済む

俺の中で不安材料であったカゲタロウも予想以上に優秀だったこと

もあり、今の俺はとても機嫌が良い

次はメキシコ辺りに手を出そうかな

- カゲタロウ side -

俺の中でのクロコダイルの印象は悪くなる一方だ

行かないでくれ

と泣きじゃくりながらクロコダイルの脚に掴まるテオドラ第三皇女に明らかに面倒くさそうな視線を浴びせ続け、終いには舌打ちをした時

「アンタそれでもテオドラ様の騎士か！！」

と言ってやった

．．．心の中で

その舌打ちに気付き、クロコダイルの顔を見た時の第三皇女の顔は忘れられないだろう

「ごめんなさい、嫌わないで」

と泣きながら何度も繰り返す第三皇女は

「俺がテオドラ様を嫌いになるわけじゃないですが、ですから旧世界行きの許可を貰えますよね？」

と和やかに微笑みながら言ったあいつの言葉に折れた

コロンビアでマフィア連中と退治した時

「殺し合え、生き延びた一人だけ俺の部下にしてやる」

と奴が言った直後、十数人が同士討ちを始めたのは驚いた

あいつが国中のマフィア共を纏め上げた後にバロックワークスという名前の組織を再構築したばかりの頃、ボゴタという所の土地で一軒のレストランが立ち退きに応じなかったことがあった

俺はあいつに

「あそこは何代も前から今まで引き継いできた店らしく、立ち退くことはないだろう」

と、あの土地を諦めるように進言した

その次の日あいつと飯喰ってる時に麻薬中毒者がトラックでそのレストランに突っ込んだというニュースを聞き

「さっさと立ち退いていたらこんな事にはならなかっただろうに」

と俺の言葉に

「全くだ、素直に交渉に応じていれば俺もこんな手段は使わなかったんだがな、俺に逆らうとは馬鹿な奴らだ」

という返答が返ってきたことで背筋が震えたのは記憶に新しい

そんな俺の中で評価最低の奴にさっき呼び出された

「失礼します、ボス」

一声掛けて部屋に入る

するとバッジが投げ渡された

「何です？これは？」

「お前にはM r・1っていう役職に着いてもらっ

「その役職ではいつたいどんな？」

「つまりこの俺、M r・0の補助でブロックワークスで俺の次に偉い役職だ」

・ ・ ・ っ少しだけ評価が上がった

カゲタロウの憂鬱（後書き）

次も早めに更新頑張ります

クロコダイルカンパニー（笑）（前書き）

今回はカゲタロウ視点オンリーです

クロコダイルカンパニー（笑）

- カゲタロウ side -

バロックワークスはクロコダイルの方針で利潤を求めて只管に勢力圏の拡大に勤しんだ

あいつが今求めている利潤とは金より土地、武力、人のことでそれを得るために国外での抗争を繰り返した

立て続けの抗争には金が馬鹿みたいに掛かったが抗争の最中も様々な国際マフィアと麻薬取引を自国内で続けた結果抗争資金が無くなる事態も起こらずに済んだ

対称に自分達のシマが抗争地帯となっている抗争相手の奴らはそんな危険な土地で商売など出来る筈もなく衰弱している時に潰させられていった

中には降伏しておきながら内部で裏切った奴も居たが、あいつがそれを許す筈が無い

舌を噛み切らせないとボールギャグを装着させた状態で頭を耳の穴、口の中まで念入りにウォッカ濡れに、その後火を付けて人間線香花火にさせられていた

頭しか燃えないから中々死ねずにジタバタと苦しんで最後にはシヨツク死

．．．あんだマジで恐ろしいわ

そんな見せしめのお陰でウチに宣戦布告されたら直ぐに降伏するよ

うな奴らがかなり増えてきた

結果、金はポンポン飛んでいったが、僅か半年程で構成員は5000に届き、準構成員を含めれば8000超の国際マフィアに

新しく部下になった奴らが言うにはあいつは恐皇とか言うともんでもない呼ばれ方をしているらしい
あいつはその呼び名についてブチ切れると思っていたが寧ろ喜んで
いた

聞けば世間に恐れられた方が仕事が捗るとのこと

そして今日もあいつに呼び出された

「麻薬、売春、恐喝、みかじめ、強盗とか色々やってるウチだがそろそろ次の段階に移ろうと思ってる」

「・・・次は国でも乗っ取るんですか恐皇さん？」

マジで言いそうだから困る

「それも良いな・・・だが、先ずはウチを合法化させるつもりだ」
「いやいやいやいや」

「待て待て、合法化ってバロックワークスはどうするんだよ!?!?ここまでデカくしておいて潰すのかよ!?!?」

犯罪組織だがこの会社には既に愛着が湧いてしまっている

「いや、バロックワークスも続ける。俺が言いたいのは俺達はかなりの武力を手に入れた、今度はそれをバックアップに真つ当な商売を始めようってことだ」

．．．暴力を行使するような商売が真つ当な商売と言えるのだろうか

「．．．それで？何を始めるんだ？」

「不動産、カジノホテルの経営とか良いんじゃない？ってことで警察掻い潜るために会社作ったからそれでデツカくいこうぜ！」

．．．ああ、もう決定事項なのね

「で、社名は？クロコダイルカンパニーとか？」

「お前、ネーミングセンス皆無どころか行使すらしてねえな。社名はホテルバロックワークスにした」

ホテルバロックワークス考えた奴にネーミングセンス皆無って言われた

．．．ていうか

「一切隠せてねえよ！！」

クロコダイルカンパニー（笑）（後書き）

カゲタロウもだんだん打ち解けて来ましたね

次は皆大好きテオドラ side の予定です

にめーとるじゅっさんせんち（前書き）

次の更新は遅くなるかもしれないので短いですが投稿

にめーとるじゅうさんせんち

- テオドラ side -

クロコダイルが帝国を離れた後、オスティア崩壊や、アリカ女王が捕まったりなどと様々な事件が起こった

暫くはそれらの対応に追われる日々
最近はやつと落ち着いてきた

そして今日はおよそ半年ぶりのクロコダイルとの話合い
呼び出しに応じてくれた、唯それだけのことの筈なのにとても嬉しく思う

いつでも帰ってきてても良いようにとたまにの休日彼の家に行き、溜まった埃を掃除していた
その度に経過した日数を実感する

彼が出て行ってからの数日は何もする気が起きず、部屋で泣いているだけの日々だった

戦争が終わったことは喜ぶべきことの筈なのに、クロコダイルが居なくなつてからは素直に喜べなくなった

妾はクロコダイルと戦争で疲弊した帝国を建て直したかった

戦争が続いて居ればクロコダイルは側に居てくれたのだろうか
そんな醜いことを考えてしまう自分がいる

一度は死のうとさえ思った
が、死ねば彼とは会えなくなる
そのことが堪らなく嫌で死ねなかった

しかし、今日やっと会える

ここで働いて居た時に欲しがってたクロコダイルのスーツをプレゼントに

彼の家のタンスの中を何度も整理しているから
服のサイズは把握している

多少太っても着れる様に少し余裕を持って仕立てて貰った
快適な時間を過ごしてもらえるために彼が普段吸っていた葉巻も買
っておいた

自分のお小遣いでなければ意味が無いと思い全て自腹
暫くは好きな物を買えない日々が続くだろうが構わない
早く会いたい、会いたくて仕方ない

そう思っていると部屋にノックの音が響いた
「テオドラ様、クロコダイルです」

「入るのじゃ」

自分の声が酷く震えて居るのに気付いた
ドアが開いてその姿を見て思う

失敗した

身長がたった半年でかなり伸びている

肩幅も広くなり

どう頑張っても用意したプレゼントは着れないことは明白
涙目で半年の間会えなかったことを呪った

にめーとるじじゅうせんち（後書き）

公式設定で253cmらしいです

理由を突き止める！！（前書き）

思いのほか早く出来ました

理由を突き止める！！

- テオドラ side -

「まあ、座るのじゃ。お主の好きな葉巻を用意して置いたのじゃ」

クロコダイルを前にしても無駄になってしまったスーツのことを考えてしまう

無駄になったからといって高かったから捨てたくは無いし

まあダブルスーツだから自分が大きくなってから着れば良いかと、踏ん切りを付けようと頑張っていると

「なら座らせていただきます」

とドア越しでは感じる事の出来なかった躰の芯から震えるような声が聞こえクロコダイルに目を向けた

そこには目を見るだけで逃げなくなる程鋭いが逸らすことが出来なくなる眼光が

この側に居るだけで身の毛のよだつ程の恐ろしさ

ああ、クロコダイルが目の前に居る

そのことに感動しつつも彼に話を振る

「吸わんのか？もしかして銘柄を間違えたのかの？」

そんな筈は無いとは思うが

「それよりも早く今回の呼び出しの理由を聞きたいです」

もう少し話をしたい

そう思いつつもクロコダイルの雰囲気を押されてしまう

「そ、そうじゃな。わかつたのじゃ。」

呼び出したのはお主が旧世界で設立したバロックワークスという組織についての話じゃ」

話を聞いた時は耳を疑った

マフィアを設立して麻薬を流通させているなど彼の本質を知る者は信じられないだろう

紅き翼の皆は何か理由があるのでは無いかと言っていた
自分でもそう思いその理由を聞く為に呼び出した

「やはりそのことですか、どこまで知っているんです？」

「かなりの量の麻薬を取り扱うとんでも無く凶暴な武闘派マフィアと聞いたのじゃが本当か？」

「ええ、大体そんな感じです。で、話とは何が聞きたいのですか？」

「そのマフィアを設立した理由は何なのじゃ？」

「そりゃ金が欲しいからですよ」

「．．．だから麻薬か？」

「ええ、そうです」

ジャックにも言われた

正直に言わないかもしれないと

大戦中は外道を行ったがそれには理由があった
帝国を守る為という理由が

それにこの男はメリット、デメリットを考えて行動する男だ
帝国の英雄という金なら幾らでも手に入る立場にありながら旧世界
の金の為に外道を行うとは思えない
明らかにデメリットの方が上回っている

「正直に答えるのじゃクロコダイル、何故旧世界なのじゃ？お主が
外道を行わなければ達成できない何かとは一体何なのじゃ？」

「ですから金の為ですよ」

「嘘を付くな！お主が今更旧世界で金の為に働く理由など無い筈じ
や！あのカゲタロウという奴が原因かと考えたがお主があんな奴
に良いように使われる筈が無い、話すのじゃクロコダイルお主が旧
世界で力を溜めている理由はなんなのじゃ！？」

「今回の件は俺の立案です、カゲタロウは関係ありません」

「占いで色々解ったから旧世界へ行く、そうお主は言ったのじゃ。
お主は占いなど出来ぬ筈、その占いを行った者は誰じゃ！？そやつ
は何を占ったのじゃ！？」

「.....」

この沈黙は凶星か？

恐らくはその占いの内容がクロコダイルにとって許容出来ないものだったのだろう

だから動き出した

そしてそれは話せない内容・・・

「今回は一先ず帰らせて貰います、続きはまたの機会に失礼します」

「待つんじゃない！クロコダイル！！」

呼び止めたが早足で去って行ってしまった

全然話すことが出来なかった

だが、クロコダイルが何かに巻き込まれていることはわかった
取り敢えずジャックに今回の話を相談しなければ

ふと、用意したのに結局口を付けなかった葉巻を見る

彼の匂いを思い出したくなり

その一本を吸ってみる

「ゴホッ！！ゴホッ！！」

まだ幼い体軀は煙を受け付けることは無かった

自分にはまだ早い

そう思い、それを灰皿に入れ、そこから広がる匂いに心を落ち着かせ

愛しい男がこれから何をなそうとして居るのかを突き止めることを

誓った

「占いで色々解ったから旧世界へ行く、そうお主は言ったのじゃ。
お主は占いなど出来ぬ筈、その占いを行った者は誰じゃ！？そやつ
は何を占ったのじゃ！？」

．．．一体どんな言い訳したんだあの日の俺よ

理由を突き止める！！（後書き）

テオ、前提が間違っているよ

君たちが思っている本質は勘違い

更にクロコダイルからしたら神様を楽しませられない今の帝国に居ること自体がデメリットなんだよ

そしてクロコダイルは困った時に占いって言うその悪い癖を直せ

明らかな人選ミス（前書き）

最近かなりのペースで更新してる

誰か褒めて（＊、´、`）

とまあ冗談はさておき実際このペースで更新かなりキツイ
このペースで書いてる他の作者さんマジ凄え

明らかな人選ミス

原作のアリカ処刑を食い止めるのには参加することにした

参加せずに紅き翼の連中と気まずくなつて連絡を取り辛くなるのは避けたかったからだ

病室でラカンとの打ち解けてからナギ達もラカンと同じように接して来るようになった

麻薬に関して口出しをして来るのが非常にウザいがそれさえ無視すれば良い友人達だ

ちなみに今は皆で京都に居る

心良く話せる友人が出来たことにとても嬉しく思う

最近は今までの自分とは変わったと実感することが増えてきた

例えばラカンがやたらと

テオドラは良い女

将来は絶対に美人になる

泣かせたら承知しない

などと惚気を言つて来たから

「やつぱりな、前々からデキてるんじゃないかと思つてたんだ。俺はお前らを応援してるぜ」

と言つてやつた

昔の俺なら心から他人の祝福など出来なかったが

今なら出来る

こんな違いがとても嬉しくてこの世界に来て良かったと実感する

- ラカン side -

テオドラすまない

クロコダイルにお前を意識させようと頑張ったんだが

「やっぱりな、前々からデキてるんじゃないかと思ってたんだ。俺はお前らを応援してるぜ」

．．寧ろ悪化してしまった

訂正しようとしたが

心の底から祝福してくれているあいつの笑顔を見て何も言えなかった
ヘタレな俺を許してくれ

その後詠春やアリ力達に散々怒られた

- カゲタロウ side -

「ボス、カジノって言ってもこの外観は幾らなんでもはっちゃけ過ぎじゃないですか？」

クロコダイルがベガスに建てたカジノホテル

どんな馬鹿が聞いてもマフィアの二次団体と一発でわかる社名でベガスの審査を抜けるとは

どんな手段を使えばこんな事が出来るのか

いや、この人のことだからどうせ恐喝したんだろうけどさ
でもどんなレベルのお偉いさんをどんなレベルで恐喝すればこんな
無茶が通るのだろうか

いや、今はそれよりも新しく出来たホテルバロックワークス一号店
が問題だ

クロコダイルが外観のデザインを決めたと聞いて少し不安にはなった
しかし、記念すべき一号店のデザインを自分で決めたいという気持
ちもわからないことでもないし

それにデザインに夢中になっている間は他に喧嘩を売るような行為
をしないだろうと思い

余計な口を挟まなかった

そして建設を依頼して暫くたった今

出来上がったと聞いたのでさっさと仕事を切り上げてベガスへ来た

が、このデザインは一体何なんだ

「どうだ？カジノに相応しいド派手な建物じゃね？」

脚が竦みそうになる舌のように伸びる長く広いレッドカーペット
それを辿れば見える真っ赤なレッドカーペットによく映える白で描
かれた建物の入り口へと続く階段はまるで歯のようだ
シルエットを色濃くする建物全体に仕込まれた黄色いイルミネーシ
ョン

そして冒頭へと戻る

「ボス、カジノって言ってもこの外観は幾らなんでもはっちゃけ過ぎじゃないですか？」

「いや、これ位やってやしないと話題にならないだろう」

「そりゃ話題性は充分でしょうね、だってワニだもの。」

そう

この建物はワニをモチーフにしているのだ
道行く人はガン見

．．．幾ら金を掛けたらこんな建物が出るんだ

「いやいや、絶対これからはこういうカジノが流行るんだって」

こいつがこう言う根拠はわかってる

「また占いですか？」

「．．．うん」

全くもって前途多難だ

．．．これ口癖になってきた

明らかな人選ミス（後書き）

テオドラとカゲタロウの人選ミスの話

二人はきつとナイスコンビ（前書き）

アンチ沸くのも嫌なんで警告しときます

注意、結構洒落にならない外道成分が含まれてます

俺外道（笑）大好きレベルなら読まない方が良いでしょう

二人はきっとナイスコンビ

- カゲタロウ side -

此処数年は色々なことが起きた

「俺たちの戸籍ってどうなってるんですか？」

そんな迂闊な一言が原因で俺の名前は鰐淵翳太郎になり、その上仮面まで外された

「カゲタロウだから和名だろ？これだけ敵つい名前なら直ぐに有名になれそうだ。てかお前仮面外したら特徴ねえな」

ちなみにこいつはサー・クロコダイルのままらしい

あっちなら兎も角旧世界でサーの称号を使っても良いのだろうか・

それから暫くしてバロックワークスはソビエトの領土にまで勢力を伸ばし始めた

チエルノブイリでの事件以後に放射能の悪影響などを証明しようと動いた学者が次々に不審な死を遂げたり

マフィアに狙われているというのにソビエト政府からの妨害が皆無だったり

などとクロコダイルと出会ってから色々と修羅場を潜り抜けた俺でも流石にヤバ過ぎると思えることばかりで

そのヤバさは素人目にもわかる程、晴れて俺達の名前は全世界に知れ渡った

その後一気に勢力を拡大してからは明らかに俺達をモデルにしたような映画が出来たりとマフィアとは思えない程有名人になった

今では直系の構成員が20000人を超え

外様を含めれば何人居るのか予想も立てられない程にデカくて凶暴なマフィアになった

最初は慣れなかった鰐淵という名前も世間では定着してしまったようだ

そして今日は束の間の一時

我らが恐皇サマは一週間程前に詠春さんの家に産まれた娘さんを見に行った

今頃はその娘さんに泣かれているのだろう

仕方ないよね、あの人恐いし
と思ってる

「鰐淵さん、ボスからお電話です」

部下の一人がそう言った

マジかよ・・・そう思いながら電話を取る

「どうしたんですボス？木乃香ちゃんでしたっけ？その子に泣かれて寂しかったから電話して来たんですか？」

「何故泣かれたことを知ってるのか問い詰めたいがお前に仕事だ」

やっぱり泣かれたのかと思いつつ話を聞く

「肌は褐色で魔族とのハーフの魔眼持ち、今生えてるかわからんが髪は黒の赤ん坊を物心付く程度に育つ前に探し出せ、日本時間で去

年の四月二日から今までの間に産まれていると思う」

「はぁ、また例の占いですか。わかりましたが何処を探せば良いんです？」

クロコダイルの占いのノートの内容は決まって利益を得るか、損害を防ぐかをしてくれる

今回もその赤ん坊が俺達にとって重要な存在になるんだろう

「そうだな・・・中東かな？正直わかんないわ、でもどっか居る筈だから」

「・・・広いとかそういうレベルじゃねえオイ、その赤ん坊が物心着く前に見付けるとなると金が相当飛びますが幾らまで使っても良いんです？」

正気の沙汰とは思えない

たかが赤ん坊一人に幾ら掛けるつもりだ

「お前の裁量に任せるわ、早めに見付けてくれや」

「それ程までに重要な存在ですか、わかりました。で、その娘をどうするんですか？流石に赤ん坊を殺したくはないんですが」

「俺の娘にする」

ブチッ

俺は大きく息を吸い込む

「見損なっただぞクロコダイル！そんなことに部下が血と薬に塗れて

必死に稼いだ金を使うなどとあんたが血迷う程に詠春さんの家の木乃香ちゃんがそんなに可愛かったのか！？ああ！？」

久しぶりに怒鳴り散らす

「頭冷やせよ、娘が欲しいってだけで冗談みたいに金使う訳無いだろ？」

「・・・何が本当の目的何ですか？」

此処いらで置いて置かないと後ではぐらかされそうだからな

「なに、後数年で産まれてくるナギの息子のパートナー作りだよ」

きつと今嗤っているのだろう

「相変わらず悪趣味ですね」

そう呟いた

紛れもなく本心からの言葉だった

「そんなの今更だろ、確か名前は龍宮・・・じゃなくてマナ＝アルカナだったか？ああ、言わなくてもわかると思うが「親は殺せば良いんですよね？」・・・良くわかってるじゃないか」

わかるよそれ位

何年あんたの右腕やってると思ってるんだ

二人はきつとナイスコンビ（後書き）

赤ん坊誘拐するオリ主なんて見たこと無いわ

あとカゲタロウ

お前も悪趣味だよ

マナッククロコダイル（前書き）

久しぶりの主人公視点

マナックロコダイル

「さてどうするよ？」

スヤスヤとベッドで寝ている赤ん坊を挟んでカゲタロウに声を掛ける
生後約半年らしい

今日はマナがウチへやって来る予定だった
攫いに行つてた奴からマナを受け取るのはカゲタロウが無事に済ませ
せて

此処まで連れて来る間はぐっすり寝ていたらしく特に苦勞せずに連
れて帰つて来れた

それから用意して置いたベッドに寝かせて
部下達には本屋へと赤ん坊の世話の仕方が書いてある本など取り敢
えず世話の仕方がわかる物を買に行かせた

しかし、部下達を送り出した直後問題が発生した
カゲタロウがほっぺをつついて遊んでいた所為でマナの目が覚め
その上、ほっぺをつつかれたのがよっぽど気に入らなかつたのかグ
ズリ出してしまったのだ

ベビーシッターが来るのは明日からで
今は俺とカゲタロウしか居ないと言つのにだ

残つた俺達二人は取り敢えず世話をして見たく思つて何をすれば良
いか聞くために詠春の家に電話を掛けた
が、普段は奥さんが世話をしているが今は不在なのでわからないと
のこと

詠春自身はゲップさせないといけないことしか知らないらしい
カゲタロウと話し合って取り敢えずゲップをさせようという話になり
コーラを飲ませようとしたが口に含んだ瞬間に大泣き
今は必死にあやして落ち着き眠ったところだ
「どうするってミルクとか用意して置いたら良いんじゃない？」

カゲタロウが部屋の隅に視線を向け俺も釣られてそっちを見る
そこには大量の粉ミルク、紙オムツ、赤ちゃん服など必要そうな物が
積み上がっている
カゲタロウがマナを受け取っている間に俺が用意した物だ
「そうじゃなくてさ、ほら良くあるじゃん熱湯で消毒してから使う
みたいな」

俺は断片的な知識を寄せ集めて解決する事にした
「・・・マナをですか？」

カゲタロウ君、そんなことしたらマナ死んじゃうよ
「いやいや、おかしいだろ。きつと紙オムツとかの話だろ、清潔に
みたいな」

例え使い捨てとはいえ油断してはいけないのだろう
「幾ら何でも紙オムツを熱湯消毒なんて聞いた事無いですよ、何か
と勘違いしてるんじゃないですか？」

「いや、ゲップやら何やら俺達の予想も付かないことをさせるんだ。
熱湯で消毒された紙オムツも不思議では無い」

しかし、試しに熱湯消毒した紙オムツはドロドロになった
そしてカゲタロウが何かを思い付いたらしい
「確か人肌位に温めるんじゃないですか？」

「．．．マナをか？」

人肌位に温めるまでも無く人肌だろ

「紙オムツの話でしょ？冷たいとビックリしちゃうみたいな」

．．．いや、でもこれ

「冷たいか？」

「冷たくは．．．無いですね、どうしましょう」

俺達が困っていると扉が開いた

「鰐淵さん！子育ての本買って来ました！」

部下が帰って来た

「やっとか！待ちくたびれたぞ！」

「ちょっとお前らそんなに煩くしたら．．．」

あー、だー

「起きちゃったじゃねえか馬鹿。で、何すれば良いんだ？」

カゲタロウと本を覗き込む

「えーと、消毒するのは哺乳瓶みたいですね」

「人肌に温めるのはミルクの話か」

「ミルク飲ませた後にゲップさせるみたいですね」

こうして一日中俺達は知識を得ながらマナの世話をしていた

マナッククロコダイル（後書き）

たまにはこう言う話もありかな？

どう見ても娘さんです、本当に有難うございました（前書き）

少し時間が飛びます

どう見ても娘さんです、本当に有難うございました

- マナ side -

今さつき麻帆良学園への入学式が終わった
入学式があつた体育館から出てお父さんを探す

「お父さんその人は？」

待ち合わせ場所にはお父さんとカゲおじさんの他に女の子を連れた
男の人が居た

親し気に話してる所から知り合いのようだ

「君がマナちゃんですね、はじめまして私の名前は近衛詠春と言います」

詠春さんと言う人が話し掛けてきたので挨拶を返す

「はじめましてマナ」クロコダイルと申します、お父さんのお友達
ですか？」

「ええ、私は君のお父さんとは古くからの友人です。それにしても
礼儀正しい良い子ですね」

詠春さんはそう言つて頭を撫でて

「ほら、木乃香も挨拶しなさい」

後ろの女の子に声を掛けた

「はじめまして、近衛木乃香言います、いつも父様がお世話になつてます」

と挨拶をしてきた

「一応赤ん坊の時に会ってるんだがな、俺はサーニクロコダイルだ」

「鰐淵翳太郎だ、木乃香ちゃんはしっかりしてるな流石詠春さんの娘さんだ」

お父さん達を前に良く恐がらずに居られるとは凄いなと感心している

お父さん達に挨拶を済ませた女の子は私の方にやってきた

「はじめまして！ウチ木乃香って言うんよ、マナちゃんこれからよろしくな！」

「ああ、これからよろしくな木乃香ちゃん」

聞けば木乃香も今年から麻帆良学園の一年生らしい

その後詠春さん、木乃香ちゃん含めて皆でご飯を食べに行った

食事の場でおじさんが私が友達が居ないのを暴露したり、ならウチが友達にと木乃香ちゃんが立候補したり、木乃香がちゃん付けするのを止めてと言ったり、なら私もマナと呼んでくれなどと色々あった

木乃香達と別れホテルに戻ってふと思う

お父さん達と離れて寮で過ごせるだろうか

普段から無愛想でめちゃくちゃ恐くて話し掛け辛いお父さんだがそれでも一緒に暮らしたいのが本音だ

でもそれは無理と言われた

理由は私の安全の為とのこと

バロックワークスへの復讐を狙う者から守る為に私にはガードが着いている

が、流石に学校内までガードを連れ込むことは出来ないから治安の

良い学校に通わせると言うのがお父さん、おじさんの考えらしい
お父さんが私を心配してくれることにとても嬉しく思う

何故なら普段から血の繋がった娘を愛していないのではないかと思
えるくらい無愛想なお父さんが実は心配してくれていたのだ

嬉しいに決まってる

だが、愛してくれていると知ったことで余計に離れて暮らしたくは
ない

まあ、お父さんに迷惑を掛けたくは無いから大人しく言うことを聞
けれど……

- 詠春 side -

おかしいですね

二人が結ばれたという話は聞いていないのですが

……しかし

「はじめましてマナークロコダイルと申します、お父さんのお友達
ですか？」

鋭い目付き、艶のある黒髪、褐色の肌

誰がどうみても二人の娘

産まれて半年程経過してからの娘が出来たという連絡やクロコダイ
ルの姓を名乗っていることも考えて何か事情があるのは明白

今までクロコダイル、テオドラ様兩名から何の話も聞いていないこ
とも含めて触れて欲しくは無い内容なのでしょう

「ええ、私は君のお父さんとは古くからの友人です。それにしても
礼儀正しい良い子ですね」

全く、さっさとくっ付いてしまえば良いのに

どう見ても娘さんです、本当に有難うございました（後書き）

どう見ても二人の娘です本当に有難うございました b y 詠春

皆のトラウマ（前書き）

奈々様の新しいブルーレイ・・・楽しみだ

皆のトラウマ

- カゲタロウ side -

目の前では一人の男が正座している

「話を纏めるとお前が攻めてきたのはメガロの指示ではなく独断なんだな？」

ひんやりとしたコンクリートに正座しているパンツ一丁の男

「その状態なら逃げられないだろ、それに豚野郎に服を着せて自分を俺らと対等に勘違いされても困るからな」との指示がパンイチの理由、勿論指示の出処は恐皇様

目の前の男は震えながら頷く

俺らの悪名はやはり魔法世界でも広まっていたようだ

だが、メガロは大戦時の恐怖からか何故か未だにクロコダイル庇う第三皇女の手前か控えめに注意してくるだけ

軍に至ってはビビり過ぎて少しでも悪口を言えば英雄を侮辱したと言ってかなり厳しく処分して二度と言わないようにしているらしい

ビビりまくってる理由は今の軍の上層部の全員が大戦期を経験している世代でクロコダイルの恐ろしさを知っているから

特に大戦期に使いつ走りをしていた奴等は軍部の行なったクロコダイルの事に関してのカウンセリングで全員が心的外傷後ストレス障害と診断されたらしい

全て目の前の男から聞いた

この男は人々を苦しめるクロコダイルに対して何のアクションも示さない軍に腹を立てて攻めて来たらしい

大した度胸だ

単身攻めてくる自信は確かに本物で中々強かった

俺だけなら挺子摺っただろう

だがこの男軍に移めていながらクロコダイルの理不尽な体質を知らなかったようで

そのままボコられ尋問され今に至る

「俺は此れからどうなるんでしょうか？」

殺されるんじゃないか？

そう言つと涙目になりながら

「そうですか」

と一言

しかしこの男すっかり敬語が板に付いている

そんな事を思っているとクロコダイルが部屋に入って来た

クロコダイルを見てシャキツと言う擬音を使いたくなる位に男が背筋を正す

「お前は どうする？ 殺されたいか？ それとも奴隷のように俺に扱き使われるか？」

え、開口一番に何その究極の二択

しかし男は

「是非とも奴隷で！！」

．．．即答だった

攻めて来た当初の度胸は何処へやら

よっぽど恐かったのだろう

まあそりゃそうか、世界中から恐皇って呼ばれてるんだもの

「んー、じゃあお前の名前は・・・ボン＝クレーで」

この男のネーミングセンスはどうなってるのだろう・・・
「ありがとうございます!!」

あ、その名前で良いんだ

「なら早速ボンちゃんらしくオカマにならないとな」

「は？」

何がボンちゃんらしくなのかはさて置き、こ愁傷様

やたら屈強な男等に引き摺られて行き

アッー

との叫び声が

「「うわ・・・」」

かなり耳に残る叫び声だった

数日後

クロコダイルに呼び出された

そこで見たのは

「カゲタロウ、今日からボンちゃんをお前の下に付ける」

「じょーうだんじゃないわよーう、カゲちゃんの下に付くのはオ
ーケーだけどMr.2にしてくれるって言う話だったでしょう？ク
ロちゃんはあちしを信用してない訳え？」

「実力は信用してるさ、だが信頼は出来ないからなカゲタロウの下

で実績を積んでくれ
．．オカマだった

皆のトラウマ（後書き）

サブタイトル考えるのが何気に楽しみだったりする

楽しく虚しい恋バナ（前書き）

お待たせしました

結構用事が多くて中々捗りませんでした

楽しく虚しい恋バナ

- マナ side -

「聞いてくれあやか、桜咲のやつ昨日もまた夜中に部屋から抜け出したんだ。あれは絶対男だ、間違いない」

「もう、マナさんったら。何度も言ってるでしょう？同じ部屋のあなたが門限を守るように注意するべきだよ。」

「今朝ちゃんと言ったさ。愛しのあの人とはどうだい？進んでいるかい？とね、でもあいつ私をキツく睨んで出て行ったんだ」

「それは注意でも何でも無いでしょう、きっと彼女には人の恋路を探ってくる嫌な奴と思われましたよ」

「そんなつもりはなかったんだが、私はお前が夜中に歩いていくのを知ってるぞという意味で言ったんだ」

今日はこの2 - Aに新任の先生が来る日だ

周りはその先生について話している

そんな中で私とあやかは恋バナ中である

それもその内容が自分達ではなく他人の恋という見るととても哀愁感漂う恋バナである

ふと扉を見ると噂の先生を迎えに行っていた明日菜達が教室に入ってきて来た

「おはよう、明日菜と木乃香ご苦労様。で、どうだ？新任の先生は明日菜のお眼鏡には叶ったのか？」

「んー、あの先生は明日菜のオジサマ趣味とは合わんやろうなあ。でも先生と話してる明日菜楽しそうやったで」

こっちに近付きながら木乃香が答える

「もう、どこが楽しそうだったのよ。色んな意味であんなのが新任なんて信じられないわ」

オジコンである明日菜から見た新任の先生の評価は信じられないとの事だった

「さっきまで全然だったがそう聞くと少し興味が出て来たな」

「あら、私は元々興味はありましたわ。この教室でそこまで興味が無いのはマナさんだけじゃないですか？それにしても先生まで恋愛対象に含めるなんて恐ろしいですね、流石オジコン」

そうだろうか

マクダウエルは爆睡してるが・・・

それよりそんな事言ったらまた明日菜が

「あー、あいつはむしろ委員長向けだと思っわ」

「なに？明日菜が怒らないだと？あの年々短気になっている明日菜が？」

「・・・声に出てるわよマナ、っと噂をすればって感じね。・・・
つて、え？」

明日菜の視線を追うと頭の上に黒板消しを乗せている子どもが派手に転んでいる姿だった

皆がざわめく中一言

「あの子が先生？確かに信じられないな。なあ、あやか？」

とあやかの方を見ると

既に子どもの方へ向かったように既に居なかった

「・・・成る程な、確かにあやか向けだな」

そう言いながら自分もこれからの学生生活に少し興味が出て来たことがわかった

楽しく虚しい恋バナ（後書き）

マナ達の初等部の話もいつか書くつもりです

今回あの二人が登場してないどころか名前すら出ていないので次の話には出したいです
そしてマナも少し勘違い

ずっと会いたかった（前書き）

感想欲しい

ずっと会いたかった

- ネギ side -

2 - Aの最下位脱出を果たし正式に教師として認められてから少し経過し終業式間近になった

「高畑先生に来て欲しいな、でも今年は成績悪かったから恥ずかしいな。それ以前に来てくれるかな」

「大丈夫や明日菜、高畑先生なら喜んで出てくれるえ。成績も今回の期末は良かったやん、マナはどうなん？」

「ああ、来てくれるらしいぞ。態々面談の為に日本に来るのは面倒いなどと言われたが来てくれるようだ、ツンデレって奴だな。後、今年はじゃなくて今年もだろ明日菜」

「マナさんの所は相変わらずですわね、何気に毎年来てくれますもの。ツンデレと言いたくはなりませんわね、面と向かって言うのは恐いですけど」

目の前で話をしている明日菜さん達

皆いつも楽しそうにお喋りをしている

とっても仲良しで羨ましいです、いつも一緒に居るんですか？と来たばかりの頃に聞いたら

仕方ないだろ、私をときめかせる男が居ないんだから

とマナさんに言われた

明日菜さん達と恋バナを良くしているマナさんだが、委員長さん曰くマナさんは恋愛経験が全く無くてそういった方面には疎いらしい

ただ、どう見ても恋人を本気で求めているようには見えない
おそらく他の人の恋路に興味があるだけで自分自身の事に関しては
さっぱりなのだろう

恋と言うものがイマイチわかっていない僕はそういう話を全然出来
ない

でも今は恋バナをしている訳では無いようなので僕でも付いて行け
るかもしれないと思い声を掛ける

「皆さん、何のお話をしているんですか？」

「三者面談よ三者面談、この間日程決めるプリント貰ったでしょ？
だから保護者が来れそうかどうかの話をしてるの」

「成る程、三者面談の話ですか。うう、緊張するなあ」

女子中等部は実家が遠い生徒が多いため保護者への負担を減らすよ
うに一年に一度だけだが面談があり、一年に一度だけと言う事で保
護者の方々も張り切って参加してくる

なので中々結果の出なかった生徒と新米教師はどうしても緊張して
しまう行事だと新田先生に教えて貰った

自分も他の新米教師の例に漏れず緊張してしまう

「私は緊張は特にしないな、寧ろ普段中々会えない父さんと会える
んだから楽しみだ」

マナさんの話を聞いて思った

僕も父さんと年に一度で良いから会いたいと羨ましいと

「マナさんの話を聞いているだけで良いお父さんと言う事が伝わ
ってきます」

そしてもう一つ思った事を其の俚言ってみた

お父さんの話をするマナさんはとても幸せそうで会う事が本当に楽しみのようだ

「ありがとう。で、話変わるけどさウチの父さんまた離婚したんだ。そろそろバツが二桁に届くかもしれない」

その後は皆で色々な事を話していたが
僕は三者面談の日程を組む為に皆と別れた

- マナ side -

「久しぶり父さん」

車から降りてきた父さんに抱きつく

「ああ、久しぶりだなマナ」

といって抱き返してくれた

お互いに色々と話しながら面談を行う教室へと向かった

「私そろそろ学校側に結婚式で休むって言うの疲れてきたんだけど、今度からはキッチンとお付き合いしてから結婚してよね。知り合って二週間で結婚ってどんだけなのさ、電撃結婚過ぎるよ。最早稲妻だよ」

「・・・今回こそは行けると思ったんだ」

「毎回同じ事言ってる、大体父さ「ここが2 - Aだな。さっさと入るぞ」・・・もう」

「あれが子ども先生か、ずっと会いたかったんだ。中々面白かった」

面談も終わり今は父さんと外食中

「めちゃくちゃ怯えられてたけどね、ニヤニヤしながらガン見されたら誰でも恐がるよ」

父さんは先生の事を初めて聞いた日からずっと会いたかったらしいでもニヤつきながらの面談って流石に失礼な気が・・・
と、内心愚痴りながらも父さんとの久しぶりの食事を楽しんだ

ずっと会いたかった（後書き）

20年って長いでしょうね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2909s/>

魔法世界に降り立った砂の王

2011年12月19日16時50分発行